

A History of Democratic Kampuchea (1975-1979) by Khamboly Dy 民主カンプチア史（1975－1979）

Documentation Center of Cambodia (DC-Cam) は1997年から2007年にかけて、独自の活動によって Pol Pot 政権時代の歴史の真実を調査し続けてきた。

Documentation Center of Cambodia
P.O. Box 1110, Phnom Penh, Cambodia
Tel.: +855 (23) 211-875
Fax.: +855 (23) 210-358
E-mail: dccam@online.com.kh
Homepage : www.dccam.org

A: 「民主カンプチア時代の歴史」 * 「カンプチア」とはカンボジアのクメール語名・旧公式名)

1. 1975－1979年のカンボジア史

著者

I. Dy, Khamboly
II. Chandler, David
III. Cougill, Wynne

この本の出版プロジェクトは、the Soros Foundation's Open Society Institute(OSI) 並びに the National Endowment for Democracy: NED からの資金提供によって実現された。Documentation Center of Cambodia (DC-Cam) の活動は、アメリカ国際開発機関(USAID) とスイス国際開発機関(SIDA)によって支援されてきた。

この出版物で紹介されている歴史的見解は、上記3名の著者独自のものであることをここで宣誓する。

著作権・出版元 : Documentation Center of Cambodia: 印刷国 : カンボジア (2007年)

全ての著作権は法律のもと保護されている。ゆえに、この出版物に記載されている写真、資料、文献などの使用、もしくは出版物のコピーはいかなる形態であれ、出版者の許可なしで行われることを固く禁じられている。

出版物デザイン : Stacy Marchelos (株式会社 Double Happiness Creations) と Youk Chhang (DC-Cam 所長) との共同プロジェクト

写真説明文の製作者 : Dacil Q.Keo, Youk Chhang
前ページの写真提供元: Tuol Sleng 虐殺記念館公文書

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 1

目次：

序文

著者謝辞

略名・用語

第一章 概略

第二章 「クメール・ルージュとはどういう人々だったのか。彼ら彼女らはどのように政治力を手に入れたのか」

1. 初期時代の共産主義運動
2. クメール人民革命党 (KPRP) の設立
3. カンプチア労働党 (WPK)
4. カンプチア共産党 (CPK)

第三章 「クメール・ルージュ政権の確立」

1. クメール・ルージュ・Phnom Penh の行進
2. カンボジア都市からの強制疎開

第四章 「民主カンブチア政府設立」

1. The Angkar
2. Sihanouk 王子カンボジア帰還
3. 憲法
4. Sihanouk 王子「国代表」地位からの辞任
5. 民主カンブチアの構成
6. 民主カンボチアによる国民周年記念日の改正

第五章 「民主カンブチア党の行政体系」

第六章 「4年計画：1977—1980年」

第七章 「民主カンブチア時代の人々の生活」

1. 共同生活の編成
2. 二つの新社会階級
3. 結婚
4. 子供・労働者権利の乱用
5. 強制労働
6. 粛清そして大量虐殺

第八章 「警備組織」

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 2

1. 警備センター
2. アンコールの敵
3. 逮捕と投獄
4. 尋問と拷問
5. 処刑

第九章「S-21 : Tuol Sleng 監獄」

1. 建物
2. 監獄者
3. 規律
4. 監獄状態
5. 尋問
6. 組織形態
7. リーダー
8. 処刑

第十章「国際関係」

第十一章「民主カンプチアの陥落」

1. 民主カンプチア政権敗退の3つの理由
2. 結果

最終論

参考文献・脚注

序文

今から八百年程前の13世紀時代、中国の外交官 Chou Ta-kuan はアンコール・ワットでの彼の生活を記録し世界にその存在を知らしめた。以来、カンボジアの歴史は外国人によって今日まで書き続けられてきている。我々カンボジア人の最も重要な文化財宝や、そして最近では1975年から1979年にかけて起こった虐殺に関しても、多くの外国人学者達の手によって調査され続けてきた。そんな中、Kamboly Dyの「民主カンプチアの歴史」は、カンボジア人によって書かれた1975年から1979年にかけての初のカンボジア史であり、この本をきっかけにカンボジア人による過去の研究と記録が行われることが期待される。この「民主カンプチアの歴史」は、著者自身が二年間に渡って行った綿密な調査に基づいて完成されたものである。

カンボジア史の中でも最も殺伐とした時代の歴史を書くことは、その時代を生き抜いてきた人々の心の傷を再び開ける恐れがあるだろう。事実、多くのカンボジア人生存者は当時の悲惨な記憶を個人の心の底に押し込め、日々の生活に邁進しようとしている。しかし過去と対

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Kamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 3

面し当時何が起こったのか、そして何故あのような惨たらしい出来事が起こったのかを理解するまでは、我々カンボジア人は自分自身そして他者との和解を達成することが出来ない。そしてこれらの問題を理解することで、我々カンボジア人は過去の傷を癒すことが出来るのである。

「民主カンブチアの歴史」は高校生を対象に出版されたものであるが、成人者にも読まれるべき内容である。我々カンボジア人は歴史から何かを学ぶことが出来る。そしてこの暗い時代の過去に向き合い学ぶことで、我々カンボジア人は他の国でも再び起こり得るこのような虐殺を阻止できる国民となることができる。事実、現在も多くの国で様々な形態の人権侵害が行われている。そして我々カンボジア人が、子供達に過去を伝えるという責任を負うことによって、その子供達はカンボジアの土地から虐殺の源となるような負の遺産を取り除き、平和をこの土地に築くことが出来るのである。

Youk Chhang
Documentation Center of Cambodia 所長

著者謝辞

この Documentation Center of Cambodia の「虐殺史教育プロジェクト」に多大なる財政的支援をしてくださった National Endowment for Democracy と Open Society 協会にこの場を借りて感謝の弁を述べたいと思います。世界中の民主化に向けて活動してきたこの二つの協会の支援により、この本を完成させることが出来ました。

また私に民主カンブチア時代の歴史教科書を執筆する機会を与えてくださり、常に私を激励し助言を与え続けてくださった DC-Cam の所長、Youk Chhang 氏にも深い感謝の辞を述べたいと思います。また Youk Chhang 氏とこのプロジェクトのアドバイザー兼編集者の Wynne Cougill 女史は私の著書の史実確認・正確さを入念に確認してくださいました。Cougill 女史は彼女のカンボジア滞在中の間、私に助言を与えてくれ、この教科書の向上に多大なる貢献をしてくださった人物の一人であります。

この本は、カンボジア国内外のカンボジア史専門家の批評を通して信頼し得る作品として出版することが出来ました。特に私と共にこの本の内容の再調査と再審理を綿密に行って下さった、カンボジア史研究家 David Chandler 教授にもこの場を借りて深い感謝を述べたいと思います。また私からの特別な感謝の念を、コンコーディア大学(カナダ・モントリオール市)で虐殺史を教えている Frank Chalk 教授にこの場を借りて述べたいと思います。私は3ヶ月間のカナダ滞在時代にチョーク教授の虐殺史を聴講し、彼の講義を通し世界中で起こった虐殺に関する知識を深めることが出来ました。また Chalk 教授は私の本に関する論説も書いて

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 4

くださいました。そしてカンボジアへのアメリカ大使 Joseph A. Mussomeli 氏にも著者の感謝の念を述べたいと思います。Mussomeli 氏は、私が国際比較虐殺研究に関する知識を深め、虐殺祈念館に関する知識を学ぶために、アメリカ・ホロコースト記念館とボイス・オブ・アメリカでのインターンシップ先への推薦状を書いて下さいました。

そして、この本の最終稿を読み、慎重かつ有用な批評を下さって Phnom Penh 王立大学の歴史家 Sambo Manara 教授にも感謝の弁を述べたいと思います。

最後に著者の感謝の念を Documentation Center of Cambodia のスタッフ、Kalyan Sann と Sampeou に捧げたいと思います。Kalyan は民主カンプチア時代からの生存者の証言と当時様々な文書で使用されていたクメール・ルージュのスローガンの収集作業をしてくださいました。そして Sampeou は Tuol Sleng 祈念館で学生達に民主カンプチア時代の歴史を教えてくださいました。彼らの貢献が私の作品をさらに向上させ、特にカンボジアの高校生にとっても読み易い内容のものにしてくださいました。また様々な形で、私のプロジェクトを支え続けてくれた、Documentation Center of Cambodia のスタッフ全員に心から感謝の言葉を述べたいと思います。

Khamboly Dy
研究者

略名・用語

Angkar Padevat : カンプチア共産党の党首
CGDK : 民主カンプチア連合政府
CIA : アメリカ連邦諜報局
CPK : カンプチア共産党
DK : 民主カンプチア党
ICP : インドネシア共産党
KGP : ソビエト連邦秘密警察
KPNLF : クメール人民国家解放前線
KR : クメール・ルージュ
KPRP : クメール・ルージュ人民革命党
PRK : クメール人民共和国
RGC : カンボジア王国政府
UNTAC : カンボジア国連過渡的当局
WPK : カンプチア労働党

写真 1 . クルマ*で果物を運ぶクメール・ルージュ党员
*カンボジアの伝統的スカーフ。多様な目的に使用されている
(Documentation Center of Cambodia 公文書)

第一章 概略

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 5

写真： Siem Reap 州での総会に出席する若者達・1973年3月23日(DC-Cam 公文書提供)

“クメール・ルージュ” (Khmer Rouge)とは、1960年に当時のカンボジア国王 Norodom Sihanouk が彼の反勢力であった共産党に対して名づけたところから始まる。彼らの正式な名称は“カンプチア共産党” (CPK) であり、1975年4月17日にカンボジア全体を支配することになる。

CPKは1976年に‘民主カンプチア国’を成立し、1979年1月までカンボジアを統制し続けてきた。しかしCPKの存在は1977年まで国民には一切内密にされており、ごく一部の幹部を除いては、誰が党首だったのかも知られずにいた（幹部達は自分達を‘Angkar Padevat’と呼んでいた）。

1975年に政権を確保した数日後に、クメール・ルージュは約二万人に及ぶ人々を Phnom Penh をはじめとする都市部から農村部へと強制移動させ、そこで農民と共に農業活動に従事することを命じた。この強制移動の途中で何千人という人々が命を落としている（1）

クメール・ルージュは同時に、過激な毛沢東主義とマルクス・レーニン主義をカンボジア社会に浸透させようと試みた。そうすることによりクメール・ルージュはカンボジアを地方中心の社会階級が皆無な社会へと変換させることを目指したのである。この目的達成のために、貨幣使用・自由市場形態・私有財産を廃止し、さらには学校制度、西洋式洋服の着用、宗教の信仰、伝統文化までも全て廃止した。多くの学校施設や寺、モスク、教会、大学、政府関連の建物は閉鎖されるか、もしくは刑務所、訓練施設、再教育施設や穀物倉へと変えられた。

民主カンプチア党の指揮下では、全ての国民の基本的権利が剥奪された。また人々は外出や他者と集まって何かを話し合うことを一切禁じられた。もしそのような行動が発覚した場合、彼らは「敵」というレッテルを貼られ、逮捕もしくは処刑される可能性があった。

民主カンプチア政権下では、家族関係も厳しく非難された。そのため人々はささやかな愛情やユーモア、同情を互いにみせることを禁じられた。クメール・ルージュは全てのカンボジア人に彼らの父そして母なる「Angkar Padevat」（つまりクメール・ルージュの幹部達）のみを信じ、敬愛しそして従うことを強制した。

クメール・ルージュは‘純粹’な人々だけが革命を達成することが出来ると主張した。彼らは政治的力を手に入れるとすぐに、Lon Nol 司令官を頭首としたクメール共和国政権時代の軍隊、兵士、公務員など数千人に及び人々を‘不純’な要員として逮捕・殺害した。その後3年にも渡り、何百もしくは何千人という数の知識人や都市住居者、チャム族やベトナム人、中国人などの少数民族が処刑された。またクメール・ルージュは彼ら自身の兵士や党員も‘裏切り者’として処刑した。

民主カンプチアの活動の中で「極秘」は常に一番重要な要因であった。事実、クメール・ルージュのスローガンに「極秘は勝利への鍵である。秘密性が高ければ高いほど、サバイバルも長くなる」というのがあった。

CPKの‘1976年度4年計画’のもと、カンボジア国民は1ヘクターにつき3トンの米を全土で生産することを命じられた。つまり一年中、人々は米を育て収穫することを義務づけられたのである。この目標を達成するために、殆どの地域のクメール・ルーージュ党员達は、国民に十分な食料や休養を与えることなく、一日12時間以上にも及び労働を課した。

さらには1977年の終わり頃カンボジアとベトナムの間で争いが勃発し、何千にもカンボジア国民が前線へと送り込まれ命を落とした。

1978年の12月、ベトナム軍とカンブチア国民救世連合軍はカンボジア国境を突破し、1979年の1月7日に首都プノンペンを制圧した。 (2)

クメール・ルーージュの幹部達は西側国境へとベトナム軍の手から逃げ、タイと中国政府の援助を得てタイ国境付近で自分達の軍隊を再編成した。また国際連合〔国連〕も、クメール・ルーージュを共産主義国中国・ベトナムに対する「抵抗勢力」（クメール・ルーージュも共産党に関わらず）とみなし、1979年から1990年にかけて民主カンブチア政権を唯一のカンボジア政府として、国連総会での彼らの議席を確保し続けた。

1982年にクメール・ルーージュはSihanouk王子と非共産主義政党のSon Sannと三者連合政府を設立した。しかし、一方で首都Phnom Penhでは、ベトナム政府の援助のもと、Heng Samrinを党首としたカンブチア人民共和国（PRK）という新政府が結成された。

クメール・ルーージュは、幹部の党员達の離党、死亡または王立政府による逮捕などで幹部全員が消える1999年まで存在し続けた。しかしその負の遺産は今も残っている。民主カンブチア時代、約2百万人のカンボジア人が、飢えや、強制労働による過度の疲労や、薬や医療サービスの欠如のために命を失った。またこの被害者の数には、多くの処刑された人々も含まれている。¹ またこの時代を生き残った人々も、当時の過酷な経験からくるトラウマに今も苦しんでいる (3)

写真：クメール・ルーージュの支配区域でエスコートされているクメール・ルーージュのリーダー達 1973年〔DC-Cam公文書〕 (3)

地図：カンボジアのキリング・フィールド：Documentation Center of Cambodiaはグローバル衛星形成写像とフィールド調査との照合でカンボジア国内に存在する集団墓所を地図化した。現在に至るまでに、クメール・ルーージュ政権時代から遡ったものとして19,733箇所の集団墓所を含む、388箇所以上に及ぶ虐殺現場が確認されている（集団墓所の定義は4つ以上の遺体が発見された墓穴とする。いくつかの墓所からは千体以上の遺体が埋葬されている）。その他として、DC-Camは民主カンブチア時代に建てた196箇所の刑務所と、その他に81箇所の虐殺祈念館を記録している (4)

第二章

「クメール・ルーージュとはどういう人々だったのか。彼ら彼女らはどのように政治力を手に入れたのか」

写真：列車に乗車中のクメール・ルーージュのリーダー達 (DC-Cam公文書) (5)

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 7

1. 初期時代の共産主義運動

カンボジアの共産主義運動は、1940年代におけるフランス植民地時代の闘争から台頭した。² 第一次インドシナ戦争の最中の1950年4月、200人にもものぼる代表団がKampot州に集合し、共産主義主導連合 Issarak 前線(通称 Khmer Issarak として知られている)を編成した。このグループは、ヴェトナム人達と共に、フランス植民地勢力と戦い続けた。

この前線軍は Son Ngoc Minh (別名: A-char Mien) の指揮下にあった。彼は元々 Unnalaom 寺院に勤める平教徒の役人だった。Son Ngoc Minh の左手として、補佐官の Chan Samay、そして局長として Sieu Heng がいた。前線軍の殆どのメンバーはベトナム語を話すカンボジア人だった。また前線軍の中の幾人かは、ベトナムで組織されたインドシナ共産党のメンバーでもあった³ (5)

殆どの前線軍の新メンバーは革命運動へと傾いていった農民達であったが、中には海外留学中に共産黨員になった国粋主義者もいた。

これらの国粋主義者の学生達の何人かはその後、カンプチア共産党 (CPK) のリーダーになった者もいる。Saloth Sar (Pol Pot とは彼の革命家としての名前であり党や政府内でもこの名前が正式名として使用された)、Son Sen、Khieu Samphan、そして Ieng Sary などがこの元海外留学生である。これらの元留学生共産党幹部達は、貧困に苦しむ農民や人々を資本主義と封建制度によって抑圧・奴隷化された人々とみなした。そして彼らはマルクス・レーニン革命論がカンボジアの独立そして社会的平等へと導く唯一の解決策と考えた。

2. クメール人民革命党 (KPRP) の設立

1951年、インドシナでのフランス植民地政策に対する戦いが激化するにつれ、ベトナム共産黨員はクメール人民革命党の編成を手引きしていった。⁴この秘密の中央委員会のメンバーは下記の通りである:

- Son Ngok Minh : 最高地位
- Sieu Heng : 軍事業務担当
- Tou Samoth(別名 A-char Sok としても知られ、もと Kampucha Krom 出身の僧であった人物): イデオロギー教育担当
- Chan Samay : 経済問題担当

1954年、第一次インドネシア戦争が終了したことにより、フランス軍はインドシナから撤退し、ヴェトミン⁵もカンボジアから撤退した。しかし、幾人かのベトナム軍人事とアドバイザーはカンボジアにその後も残った。政治体制が変わったために、革命党の安全性に不安を感じた Sieu Heng と Cham Samay、そして千人以上の KPRP の黨員達と活動家達はベトナムへと逃げ、そこでベトナムに早めに渡っていた Son Ngok Minh らと合流した。

Sieu Heng はその後すぐに、Nuon Chea (ICP のメンバーでタイとベトナムで訓練を受けた人物) と他の古参黨員達と共にカンボジアへ戻った。ハノイでは Son Ngoc Minh をトップとした臨時の中央委員会が KPRP を管理した。Sieu Heng は局長、そして Tou Samouth は補佐官の地位を獲得。Nuon Chea はナンバー 3 の地位、そして So Phim (民主主義カンプチア時代

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 8

に東部領域の長官だった人物) はナンバー 4 の人物となった。KPRP はカンボジアに滞在していたベトナム共産党員であった Pham Van Ba によって運営された。彼はカンボジアの共産主義運動はベトナムが統制を続けるべきだと主張してきた人物である。 (6)

Pol Pot (旧名 : Salah Sar) Pol Pot は 1925 年(牛年)、Kampong Thom 州で生まれる。Pol Pot の父親は裕福な地主であった。Pol Pot が 6 歳の時、Phnom Penh にある王宮の役人として勤務していた兄と住むために首都へと移る。Phnom Penh で、Pol Pot はフランス語系の学校で教育を受ける傍ら、見習い僧しても教育を受けた。

1949 年に Pol Pot はパリで教育を受けるための奨学金を受けたが、学位を取得できなかった。パリ滞在中、彼はフランス共産主義党員になり、殆どの時間を政治活動に捧げた。

1953 年にカンボジアに帰国した後、Pol Pot は私立高校で地理と歴史を教える。同時に秘密の共産主義運動に参加。1956 年、Khieu Ponnary と結婚。1960 年には当時のカンプチア労働党のナンバー・3 の地位を獲得。翌年には第二局長補佐官となり、1963 年には党局長に収まる。Pol Pot は後に Lon Nol 政権を相手にクメール・ルージュ軍隊を指揮する。

1976 年、Pol Pot は民主カンプチア党の党首となり、1979 年に辞任するが、その後もクメール・ルージュの活発なリーダーとして残る。内戦後、Pol Pot は主にタイを拠点に亡命生活を送り 1998 年 4 月 15 日に死去。彼の遺体は同年 4 月 17 日に火葬される (6)

Tou Samouth は、フランス留学から帰国したばかりの Nuon Chea と Saloth Sar(後の Pol Pot)の支援の下、都市地域で党の活動を主導し始めた。Phnom Penh の共産党員は合法的に「人民党」を作るために、Pol Pot を共産党と民主党の間の重要な交渉役として扱った。この政党は 1955 年のジェネバ協定で保証された国民総選挙に対し異議を唱えた。⁶人民党は Tou Samouth の被後見人、Keo Meas によって統括された。

Pol Pot は人民党の地位と政治要目の作成を手伝った。彼はまた、1955 年の選挙によって新しく設立された Sihanouk 王の Sangkum Reastr Niyum 党(人民社会主義共産党)に対抗するために、民主党との接触を図った。Pol Pot は反封建制・反資本主義の傾向にある民主党が選挙に勝つと信じ、彼らの勝利によって共産党にもなんらかの政治的影響力をもたらすと計算した。(7)

写真 : ココナッツ・ジュースを飲むクメール・ルージュの兵士達 (DC-Cam 公文書)
(7)

しかし、Pol Pot の考えは誤算に終わった。Sangkum Reastr Niyum 党は国会の全議席を獲得。人民党はたった 3 パーセントの議席しか勝ち取ることができなかった。この選挙の結果を受け、Sieu Heng は、カンボジア人は革命的思想よりも Sihanouk 王達が唱える政治内容の方を圧倒的に指示するのだと悟り、カンボジアで共産主義を促進することに希望がないと考えるようになった。さらには、幾人かの Issarak 運動の仲間達でさえも抵抗運動を諦め、Sihanouk 王政府に加わるようになった。

1956年、Sieu Heng は、彼の身の安全性を保証してきた国王軍長官の Lon Nol と秘密裏に連絡を取り始めるようになった。1959年、Sieu Heng は Sihanouk 王政府へと立場を変え、彼からの情報を元に政府はそれまで地下組織にいた KPRP 党員の居場所を突き止め逮捕した。Pol Pot によると、1955年から1959年にかけて、約90パーセントの KPRP 党員が逮捕・処刑されたとされる。1960年初頭までには、たった800人あまりの党員しか活動しておらず、それまでには地方にある2つの支部しか完全に機能していなかった。それらの二つの党派とは下記の通りである：

- Kampong Cham 州 (So Phim 主導)を拠点とする東部区域
- Takeo 州 (Chhit Choeun 別名 Ta Mok 議長)を拠点とした南西区域

Tou Samouth、Pol Pot、Nuon Chea は、彼ら同様フランスで教育を受けたカンボジア知識人、Ieng Sary と Son Sen からの援助を受けながら、Phnom Penh で党活動を続行した。

3. カンプチア労働党 (WPK)

1960年の9月28から30日にかけて、Phnom Penh 列車駅敷地内で KPRP の秘密結集が開かれた。この集会には都市地域にある支部から7人、そして地方支部からは14人の党員達が参加した。この結集で KPRP は再編成され、新たな政治系統を確立し、その名称をカンプチア労働党 (WPK)と改名した。この再編された労働党の中で、Tou Samouth は局長、Nuon Chea は局長補佐になった。また Pol Pot はこの時点ではナンバー・3の地位に留まったが、1961年には局長補佐へと昇進する。

1962年に Tou Samouth が失踪した。その後1963年2月、カンプチア労働党は緊急会議を設けた。⁷この会議で、Pol Pot は局長に選出される。それまで Pol Pot よりも高位にいた Nuon Chea は、彼の結婚相手の変節者の Sieu Heng と親戚関係にあった為に、局長としての座に敗れた (8)

Nuon Chea (元々の氏名 : Runglert Laodi) Nuon Chea は1926年 Battambang 州に生まれる。1942年に、Benjamabopit 寺院に滞在しながらバンコクの高校で教育を受ける。1944年、バンコクのタマサット大学で法学を専攻し、そこでタイ共産党に加わる。1950年にカンボジアへ帰国後、Nuon Chea はタイ共産党からインドシナ共産党へと所属移転する。1954年にハノイで訓練コースを受けた後、1955年に帰国。1960年にカンプチア労働党の局長補佐官となる。

民主カンプチア時代、Nuon Chea は人民代表議会の議長に任命される。彼はまた人民党中央常任委員会の局長補佐でもあった。党内でナンバー2の地位として、常任委員会で決定された厳しい政策を執行する責任を任された Nuon Chea は、警備・防衛・安全体制に関する業務に関しても重要な役割を果たした。

1979年、彼はタイーカンボジア国境付近へと亡命し、1998年 Pol Pot 死去後、Kieu Samphan と共に王国政府へと変節した。(8)

Nuon Chea は忠誠的な共産党員で、カンプチア労働党が強くなることを願っていた。ゆえに、彼は Pol Pot と局長の座を争わなかった。彼は局長補佐としての地位に留まり、その後 30 年もの間、共産主義運動の中で強力な人物として残り続けた。

その一方、局長の座を獲得した後すぐに、Pol Pot はベトナム北東地域にある ‘オフィス 100’ と呼ばれていたベトナム軍事基地に避難した。1965 年、Pol Pot は北ベトナムの労働党と話しをするため、ハノイを目指してホーチミン街道を歩き切った。彼はまた中国と北朝鮮も訪問している。Pol Pot は中国でベトナムよりも手厚い待遇を受け、その頃から彼のカンプチア労働党がベトナムの追従的な位置にいることに強い反感を持つようになった。

4. カンプチア共産党 (CPK)

1966 年 9 月、Pol Pot は海外からの帰国後、ベトナムの影響力を弱め、中国との関係を強化するために、カンプチア労働党をカンプチア共産党(CPK)へと改名した。この時点で中央委員会は Pol Pot、Nuon Chea、Ieng Sary、Vorn Vet (Phnom Penh にある Chamroeun Vichea 高校の元教師)そして Son Sen で成立された。

1960 年代後半、CPK (Sihanouk 王は、彼らを ‘クメール・ルージュ’ ユと呼んだ) はさらに新しい共産党員を獲得した。これらの多くの共産党員は、王国軍の手が届かないようなベトナム国境沿いに位置する遠隔地に住んでいた。1966 年から 1970 年の間、共産党の本拠地は Ratanak Kiri 州に設定された。

写真：カンプチア共産党協議会 (DC-Cam 公文書) (9)

地図：クメール・ルージュ開放区域・1972 年 5 月—濃いピンクはクメール・ルージュによって占領された領域で、薄いピンクのエリアはクメール共和国政府の統括下にあった地域を示している (10)

1970 年 3 月、Lon Nol 司令官と彼のアメリカ支持者の軍関係者達はクーデターを起こし、Sihanouk 王を退位させることに成功した。クーデターの直後、ベトナムとクメール・ルージュはカンボジアの殆どの領域で勢力を伸ばした。何千人というカンボジア人はアメリカ擁護の Lon Nol 率いるクメール共和国を支持することを拒絶し、Sihanouk 王を再びカンボジアの頭首として復活させるために、クメール・ルージュに加わった。この時点で Sihanouk 国王は中国へと亡命していた。そこで Sihanouk 国王は、中国・北ベトナム・そしてカンプチア共産党の支援と激励を受け、カンプチア国民連合前線と王国政府カンプチア国民連合を亡命政府として編成した。⁸CPK のメンバーはこの亡命政府のメンバーになった。

これらの展開はクメール・ルージュにとって格好の機会となった。北ベトナムと中国はクメール・ルージュを支持し、Sihanouk 国王はカンボジア国民に対し、森に入って Lon Nol 政府を転覆させるよう呼びかけた。さらにはアメリカ軍の援助によって Lon Nol 率いる共和国政府が仕掛けた共産党の兵站線や基地をめがけて落とされた激しい爆撃は、カンボジア人をさらにクメール・ルージュ支持へと傾斜させ (10) 反 Lon Nol 軍勢力はその数を増加していった。(11)

地図：クメール・ルージュ開放区域：1973年5月—濃いピンクはクメール・ルージュによって占領された領域で、薄いピンクのエリアはクメール共和党政府の統括下にあった地域を示している。

1970年、ベトナム共産党軍はカンボジア領域へと深く進攻し、クメール・ルージュと共に反乱軍の補充と養成に力を入れた。この反乱軍は1970年に3千人の兵士だったのが、1973年には4万人にまで増大した。ベトナム軍の支援を受け、クメール・ルージュはLon Nol軍を戦闘地で打破し、1972年の終わりまでには、ベトナム軍がカンボジアから撤退し、主な戦闘責任をCPKに引き継ぐまでに至った。しかし数千人のベトナム軍人はその後もカンボジアに軍顧問として残った。

1973年1月から8月にかけて、クメール共和国はアメリカからの支援を受け約50万にも及ぶ爆弾をカンボジア本土に落下し、30万人にも及ぶ人々がその爆弾によって命を落とした(11)。

この爆撃はクメール・ルージュの完全勝利への道を延ばしたが、その間にこの爆撃に恨みを抱いた人々や、爆撃によって家族を失った人々がクメール・ルージュの革命運動に参加していった。

クメール・ルージュの軍人達は、クメール共和国の軍隊よりも活発で鍛錬されていた。またクメール・ルージュの軍隊は食料や医薬品の不足にも耐えることが出来た。さらには‘クメール・ハノイ’⁹で訓練を受けた軍人達もクメール・ルージュを援護した。これらの男女達は国内では下位の地位を与えられた。その後1973年までにベトナム人顧問達の多くが祖国へ帰国した後、これらの男女はベトナムの影響から独立を目指していたクメール・ルージュのリーダー達によって暗殺された。

1973年初頭までに、カンボジア全領土の85%がクメール・ルージュの手に落ち、Lon Nol軍はもう攻撃に向かい討つことが出来なくなった。しかしアメリカからの援助によって、さらに2年間もの間クメール・ルージュ相手に戦闘を続けた。

写真(右)：民主カンブチア党機関紙「カンブチア」の表紙、1978年3月(DC-Cam公文書)

写真(下)：クメール・ルージュ開放地域のKraie州での興行(DC-Cam公文書)

(12)

第三章

「クメール・ルージュ政権の確立」

写真：王宮内でのクメール・ルージュ役人と外国人使節(DC-Cam提供)(13)

1. クメール・ルージュ・Phnom Penhの行進

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 12

1975年4月17日、カンボジアはついに5年間に渡り続いた外国からの内政干渉、爆撃そして内戦に終焉をうった。同時に、この日、Phnom Penh は共産主義勢力の手中へと落ちることになる。

黒と緑に彩られたユニフォームを身につけた反乱軍士達がこの日全ての方向から首都へと入ってきた。都市に住む人々は、道路へと群れを成し、これらの反乱軍士達へ歓声を上げたり、白い布を振って歓迎を示した。しかし、多くの人々はクメール・ルージュがラジオで声明した内容（以前の政府の要職にあった者そして軍人は処刑する）から、自分達が逮捕もしくは射殺されるのではという恐怖心から家の中に身を潜めていた。¹⁰

何百人という外国人やカンボジア人は国際赤十字が中立区域と定めた Hotel Le Phnom (現在の Hotel Le Royale)への避難を求めた。しかし、クメール・ルージュがこのホテルを占領した時に、外国人移住者、外国人ジャーナリストそして約百人近いカンボジア人がフランス大使館へと逃げた。クメール・ルージュはホテルに避難していたカンボジア人達に農業労働者として地方で働くよう命じた。約6百人近い外国人達は、タイの国境までトラックで輸送されるまでの間、二週間フランス大使館に避難した。

Phnom Penh 解放直後、クメール・ルージュはクメール共和国政府の3人の高官と何百人にも及ぶ役人そして軍人を処刑した。これらの3人の高官達は、首相を務めていた Long Boret、Sisowath Sirik Matak 王子、Lon Nol、そして恩給として百万ドル(米)を海外へ持ち出していた Lon Nol の弟であった。アメリカ合衆国はこれらの3人の人物をアメリカへ避難させることを申し出たが、彼らはカンボジアを離れることを拒否。Sirik Matak 王子はアメリカ大使館へ次の手紙を書いている。

貴殿からの自由の国への運送提供に心から感謝の念を述べたいと存じます。しかし、私にはそのような臆病な形でこの国を出ることは出来ないのです。貴殿と、そして貴殿の素晴らしい国への一言として述べたいことは、私は一瞬たりとも自由を選んだ我々国民を、貴殿が見捨てるということを考えたことはありませんでした。貴殿が我々の保護を拒否された為、私達はもう何の手段も残っておりません・・・私が犯した唯一の間違ひは、アメリカ人を信じたことです。閣下、私の親愛なる友人よ、どうかこの私の忠実かつ友好的な心情を受諾してくださいませ。

2. カンボジア都市からの強制疎

写真： ホテル・ル・プノン(Hotel Le Phnom) の前に立つクメール・ルージュ幹部と中国人顧問達 (DC-Cam 公文書) (14)

カンボジア都市地域に住んでいた殆どの人々は、新しい支配者の下で平和的に生活をし、内戦で疲弊した国を和解と調和に向けて共に働くものと信じていた。しかし、クメール・ルージュが Phnom Penh を制圧した数時間後には、都市を直ちに去るシグナルとして、党员達は宙へと発砲し始めた。

クメール・ルージュ達は、すぐに100万人の戦争避難民を含む約200万人の Phnom Penh 市民を地方へと駆り立てた。一週間以内に、これらの Phnom Penh 市民や、クメール・ルージュに管理された他の都市地域の市民達は農作業をするために地方へと移された。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 13

当時 Phnom Penh で自転車運転手をしていた Sim Soth aka Koy は、都市撤退の様子をこう回想している：（14）

写真：民主主義カンプチアの指導者達と外国人使節の会合（DC-Cam 公文書）（15）

1975年4月17日、私はいつものように生活費を稼いでいました。働きはじめてから数時間経った頃、クメール・ルーージュの兵士達が Phnom Penh に入ってくるところを目撃しました。人々は外へとやって来て、白い布やシャツを振りながら彼らを出迎えました。すると突然、これらの兵士達は宙へと発砲し、アメリカ軍の爆撃の恐れがあるので人々に街を出るよう命じました。他の人々同様、私も午前10時には自分の兄弟や、自分の寺の同僚そして僧達と共に街をあたふたと去りました。混みあった道路上で、私は人々が自分の両親や親戚を探し回っている声や、腹を空かした子供達が食べ物を求める声を聞きました。クメール・ルーージュは人々の持ち物を没収しました。彼らに抵抗した人々はその場で殺されるか、どこかへと連行されて行きました。私が地方へと歩いている際に、女のクメール・ルーージュ兵士が私の襟を掴み、私が兵士かどうかと訊いてきました。私が学生だと述べると、彼女は私を後ろへと押しのけました。私は Takhmau へと歩き続けました。その途中、私は最近殺されたと思われるふくれあがった死体を何度も見かけました。3日間に渡る徒歩での移動の後、Takeo 州へと辿りつきました。

この都市疎開に関しては、例外というものはなかった。病院にいた患者達も地方へと強制疎開させられた。疎開途中で何千人という人々、特に小さな子供達や老人、病人達が命を落とした。また多くの妊娠中だった女性達も途中で薬や医療手当てもないまま出産し命を落としている。幾人かの子供達は両親から離れ離れになった。そして多くの人々がいったい何が起きているのか全く分からずにいた。

Takeo 州の So Ry も Phnom Penh からの撤退を回想している。彼女の夫は Lon Nol 軍の兵士で、当時クメール・ルーージュとの戦闘の際に太ももに傷を負ったため（15）、Phnom Penh にある病院に送られていた。

クメール・ルーージュ兵士達は私達に病院を去るよう命じました。私は「妊娠中なうえに、主人は深い傷を負っているのだからここを去ることが出来ません」と言いました。しかし彼らは強制的な態度で私達も撤退しなくては行けないと主張しました。主人は全く歩くことが出来なかったため、私は主人と共に泣きました。しばらくして、私達は荷馬車を発見しました。私はその荷馬車に主人を乗せ、自分のスカーフで自分の首と荷馬車を結び、引き始めました。私達は Takeo 州に行きたかったのですが、兵士達は国道5号線に強制的に歩かせました。私達は Prek Kdam を通過し、米を炊くのに止まりました。食事後、兵士達はさらに動くよう言いました。私は自分の鼠頸部が炎症を起こすまで夫を乗せた荷馬車を引き続けました。途中、主人は連行され殺されました。私は大声で泣き続けましたが、何も手段がありませんでした。ついに私は Kampong Cham 州にある Chamkar Leu 区に到着しました。一月後、私は娘を出産しました。

なぜ都市を離れて地方に行かなくては行けないかという方針に関し、クメール・ルーージュはいくつもの理由を挙げた。都市撤退中、クメール・ルーージュの兵士達は人々に “アメリカ

軍が爆撃するという情報がある。しかし2・3日後には戻って来るので家に鍵をかける必要はない”と説明した。

民主カンプチアの副首相で外交問題を担当していた Ieng Sary は、後にこの都市撤退の理由を、都市に食料を運送する設備が不足していたと正当化した。他方で、1977年中国を訪問中の Pol Pot はこの都市撤退政策を“敵のスパイ組織”を壊滅するためだったと説明している。

多くの歴史家達は、このクメール・ルージュによる都市撤退政策の目的を、カンボジアを完全に農民の国にするために、その妨げとなる資本主義や汚職、封建体制を根絶するためという見解を示している。クメール・ルージュ党員達は、都市に住む人間達は邪悪で、地方に住む農民のみが改革を起こすのに十分に純粋な精神を持っていると信じていた（16）。

都市撤退後、Phnom Penh はたった4万人の人々が住む“ゴースト・タウン”と成り果てた。Phnom Penhに残った人々は、行政関係の役人や兵士、そして工場労働者であった。Phnom Penhの唯一の店(中央市場)は外交官達に物品を供給するのみとなった。クメール・ルージュはカンボジアを外界から孤立させた。彼らは一人として外国人を入国させたり、カンボジア市民が海外に出ることを許可しなかった。

数日後、Pol Pot と他の共産党の役人達が空虚化した市内に入った後、クメール・ルージュは内戦で死んでいった兵士達に対し敬意を表すセレモニーを行った。北京では、一万人以上にも及ぶ中国人と共産党の指導者達が、カンボジア共産党のアメリカ打倒を祝った。

しかし政府反乱軍のトップでもあった Sihanouk 王は、この祝宴に出席しなかった。彼はその間北京で彼の母親の Sisowath Kossamak Neary Roth Serey Vattana の死に際につき添っていた。Sihanouk 王は1970年以来北京に亡命しており、彼は中国政府から居心地の良い別荘と、政治的そして精神的な援助を受けてきた。後に Sihanouk 王はクメール・ルージュの勝利に賞賛の声明を出している（17）。

写真：野原に立ち並ぶクメール・ルージュの幹部達（DC-Cam 公文書）

第四章

「民主カンプチア政府設立」

写真：カンプチア共産党中央委員会のリーダーと党員達。向って左から Pol Pot (民主カンプチア首相兼 CPK 書記長)、Nuon Chea (CPK 副書記官兼人民代表議会総長)、Ieng Sary (外務省副首相)、Son Sen (防衛省副首相)、Vorn Vet (経済省副首相)

1. Angkar¹¹

クメール・ルージュは5年間にも渡ってロン・ノル政権時代のクメール共和国に対し戦い続けてきたにも関わらず、彼らの活動内容やリーダー達の素性についてはあまり知られていなかった。CPK は彼らの政権中、これらの情報を外に漏らすことはなく一貫して秘密性を維持し続けた。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 15

Angkar Padevat、“革命組織”はカンプチア共産党の男女によって構成された。彼ら彼女らは Pol Pot の影の信奉者として指揮された。

1975年9月、CPKの中央委員会は Pol Pot、Nuon Chea、So Phim、Ieng Sary、Son Sen、Ta Mok、Vorn Vetによって構成された（18－19）。1977年には、新たに3人のメンバー（Nhim Ros、Khieu Samphan と Ke Pauk）が委員会に加わった。Pol Pot、Ieng Sary、Son Senそして Khieu Samphanはフランスで教育を受けており、Nuon Cheaはタイとベトナムで教育を受けた。他のメンバーはそれなりに教養があったが、これらの5人ほどの高い学歴はなかった。

カンプチア共産党のリーダー達（1975－1976）

Pol Pot
書記長

Nuon Chea
副書記長

So Phim

Ieng Sary

Son Sen*

Ta Mok*

Vorn Vet*

Ke Pauk*

Khieu Samphan

Nhim Ros*

*Vorn Vet と Nhim Ros は1978年に処刑された。So Phimは1978年に自殺し、Son Senは1997年に処刑されている。Ke Paukは2002年に自然死。Ta Mokは2006年病死。

2. Sihanouk 王子カンボジア帰還

1975年の終わりまで、クメール・ルージュは自らの政権をカンプチア国民連盟王立政府と呼んだ（この政府は1970年に北京で Sihanouk 王子を頭として設立された）。

1972年まで、彼らは国際社会からの承認と国内からの支持を維持するために、Sihanouk 王子と彼の海外政府を表向きにしながら、その後ろでカンボジアの国内政権と抵抗勢力全てを支配していた。

1975年7月、クメール・ルージュは当時北朝鮮のピョンヤンに住んでいた Sihanouk 王子をカンボジアへと招いた。Sihanouk 王子は、カンボジアに帰国する前に北京に寄り、そこで中国共産党書記長の毛沢東と入院中であった首相の恩遠来に会っている。後に、王子はこう回想している。「私がカンボジアへ戻ることを決断した理由は、共産主義のクメール人達の考えに賛同したからではなく、あくまでもカンボジアと私を支え続けてくれた中国とそして偉大なる恩遠来への儀礼を称えるため自分を犠牲にしたのである。」¹²9月初旬、Pen Nuth（カンプチア国民連盟王立政府首相）、Khieu Samphan、Ieng Terithそして何人かの王室メンバー達に付き添われて、王子と彼の妻はカンボジアに帰国した（19－20）。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 16

写真：DK 雑誌の表紙、革命旗、1978年4月（Tuol Sleng 虐殺史記念館所蔵）

写真：外国人高官との会議（DC-Cam 公文書）（20）

王子は間もなく会議の議長役を得たが、実際に発言することは許可されなかった。共産党幹部が王子に与えた国家最高位という地位は、ゆえに全く政治力がなかった。カンボジアに帰国してから3週間後、王子は国連に対し国連総会でのカンボジアの議席を要求した。国内では、王子を支持していた人々が痕跡のないまま次々と消えていった。民主カンプチア時代に、約20名程の Sihanouk 王子の家族が死亡しており、少なくとも他の7人の皇室メンバーが Tuol Sleng で処刑された。

民主カンプチア国家：4月17日‘偉大なる勝利’

きらめく赤い血が母なるカンプチアの大地を包む。我らの輝く労働者と農民の血よ！

我らの青年革命家の血よ！激怒と精力的な闘争へと変質した血よ！革命旗の下の4月17日！その血は我々を奴隷から自由への身と解放した！

永遠なる4月17日、偉大なる勝利！それはアンコールワット時代よりも素晴らしく、意味深い勝利！我々ついにカンプチア国民を団結し、民主主義、平等主義、正義、独立国家、そして我々の母なる大地の防衛への固い決意に基づいた栄誉なる社会を築きあげた。

永遠なる新国家カンプチア！革命旗をさらに高く挙げ、我らの国家の大躍進達成を決意した繁栄なる民主国家カンプチア！

3. 憲法

1975年12月15日から19日にかけて、千人の議員で構成された Phnom Penh の国民会議で憲法が承認され、1975年1月5日に公布された。これにより、カンボジアの正式名は民主カンプチアと制定された。この憲法により250議席による代議制が設立され、そのうち150議席が農民代表者、そしてあとの50議席は労働者階級そして残りの50議席が革命軍で占められた。（20）

しかし、この憲法はCPKについて一切言及しておらず、また議員達も1976年4月に一度だけ会っただけで終わった。

新国歌は「4月17日の偉大なる勝利」と呼ばれた。その歌詞は Pol Pot によって作詞された。また新国旗は、赤を主体にアンコール(Angkor)をイメージした3つの黄色い塔が中心に描かれたものになった。

民主カンプチア国旗(左上): 憲法16条はこの新国旗の意味について述べている。背景の赤は革命運動、カンプチア人による自由・防衛・国会設立のための断固なる勇敢な闘争を象徴。中心の黄色い寺院は、母国の更なる繁栄のために戦ったカンプチア人の国家伝統を示している。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 17

国家表象(右下)： 憲法 17 条は民主カンブチアの国家表象の記述している。この表象は水路と運河の路線網から成り立っており、これらは国の現代的な農業と工場産業を象徴している。表象は楕円形の稲の花冠によって縁取られ、下には「民主カンブチア」という題字がある。

4. Sihanouk 王子「国家代表」地位からの退任

1976 年 3 月 11 日、CPK の常任委員会は Norodom Sihanouk 王子の辞任について討議するために集まった。委員達は王子の辞任については同意を示したが、王子が国を離れたり、発言したり、外国の外交官達に会うことは拒否した。こうして約 2 千年に及び存在し続けてきたカンボジアの皇室は終焉を迎えた。

1976 年 4 月、カンブチア人民代表会議は最初で最後の会議を開催した。代表会議は王子の退任に関し満場一致で合意し、彼の年間 8 千ドルの退職金を支払うことを決めたが、この退職金は一度も支払われることはなかった。王子の家族は皇居敷地内の小さな別邸に軟禁された。Sihanouk 王子は、民主カンブチアの崩落の直前の 1979 年 1 月まで自宅監禁された。¹³

5. 民主カンブチアの構成

民主カンブチア国家のなかで、唯一の活動的な機関は秘密下のカンブチア共産党のみであった (21)。

民主カンブチア国家の構成

Khieu Samphan
最高会議常任幹部総長
(国家党首)

Nuon Chea
人民代表会議総長

Pol Pot
首相

Ieng Sary
副首相兼外務大臣

Vorn Vet
副首相兼経済財政大臣

Son Sen
副首相兼国防大臣

外務大臣 Ieng Sary、国防大臣 Son Sen、産業大臣 Cheng An、経済財政大臣 Vorn Vet を含む閣僚が Phnom Penh に設立された。その中で実際に政府政策決定権があったのは書記長の Pol Pot と彼の補佐役であった Nuon Chea が司るカンブチア共産党常任委員会のみであった。カンブチア共産党のリーダー達は自分達が採用した憲法や法規には全く敬意を払うことはなかった。共産党常任委員会と中央委員会のメンバーはまた閣僚責任もあった。¹⁴

6. 民主カンボチアによる国民周年記念日の改正

1976 年 3 月、中央委員会はカンブチア共産党の発祥を 1950 年ではなく 1960 年に決定した。この決定により、共産党のリーダー達は 1960 年以前に共産党に参加したメンバーはもはやカンブチア共産党員とは認めないことにした。この決定の背景には、カンブチア共産党幹部

達のベトナムとのいかなる関係や影響力を否定し、1960年以前のベトナム共産党指導の重要性を拒否するといった意が込められていた。

カンプチア共産党は **Angkar** という名を隠れ実に密かにカンボジアを支配していた。しかし1977年9月、**Pol Pot** は彼の中国への訪問直前に、カンボジアでのカンプチア共産党の存在と彼自身の民主カンプチアの首相という立場をついに公の場で明らかにした。

Khieu Samphan(aka 同志 **Hern**) : 1931年 **Kampong Cham** で生まれる。フランス留学の奨学金を受け経済学の博士号を終了し、1959年に帰国。その後、**Sihanouk** 王子は彼に商業長官の地位を任命する。1964年、**Khieu Samphan** は商業長官の地位を辞任するが、その後4年間国民議会に残る。1967年に共産党の情報員という名のもと告発された後、彼はジャングルへと身を潜める。1976年、**Sihanouk** 王子の退任後、彼は民主カンプチアの最高会議常任幹部会の総長として任命さえる。1979年から1998年の間、**Khieu Samphan** は **Pol Pot** と共に国外追放者として過ごす。最後には王立カンボジア政府に変節する。
(22)

第五章 「民主カンプチア党の行政体系」

写真：野原に立つクメール・ルーージュの役人達 (DC-Cam 公文書)

1976年、カンプチア共産党は民主カンプチアを6つの地理的区域に分割した。新しく編成されたそれぞれの区域は、2つかまたそれ以上の古い州を合併してつくられた。その後、さらにこれらの区域を32の地域へと分割し、それぞれの区域と地域に番号を与えた。次の地域は区域、副区域そして共同組織の内容である。

東区域(区域203) : **So Phim** はこの区域の書記長。彼は1978年5月に自決している。この東区域はメコン河の **Khampong Cham** 東部の一部である **Prey Veng** と **Svay Rieng** 州と **Kratie** 州(**Chhlong**)からの一地域と **Kandal** 州のいくつかの区域(**Khsach Kandal**, **Lvea Em** そして **Muk Kampoul**)によって構成された。この区域はさらに20から24の5つに区域に分割された。(23)

南西区域(区域405) : **Chhit Choeun** aka **Ta Mok** がこの区域の書記長。この区域は **Takeo** と **Kampong Speu** 州の二つの区域 (**Kong Pisey** と **Samrong Tong**) そして **Kandal** の5つの区域(**Kandal Stung**, **Sa-ang**, **Koh Thom**, **Kean Svay** そして **Leuk Dek**)によって構成された。南西区域は13、25、33、35という番号で管轄される。

北方区域(区域303) : **Koy Thuon** 別名 **Thuch** はこの区域を書記長として1970年から1976年初頭まで管理する。1976年に彼が **Tuol Sleng** で処刑された後、**Ke Pauk** が1977年に中央区域を設定するまでこの地域の書記長を務めた。彼の後は **Kang Chap** が北方区域の書記長を務める。この区域はメコン河西部にある **Kampong Cham** の一部である **Kampong Thom** 州と **Kratie** 州の一区域(**Prek Prasap**)によって構成された。区域は41, 42, 43の3つの区域へと分割された。

北西区域(区域560) : Nhim Ros の区域の書記長。この区域は Pursat 州と Battambang 州によって構成され 1,2,3,4,5,6,7 までの7つの区域に分割されていた。

西区域 (区域401) : Chuo Chet が書記長。この区域は Koh Kong と Kampong Chhnang 州 Kampong Speu 州のいくつかの部分によって構成され、31、32、37、15、11の区域に分割された。

写真 : クメール・ルージュと外国人代表団 (DC-Cam 公文書)

写真 : 野原に立つクメール・ルージュ役人 (DC-Cam 公文書) (24)

北西区域 (区域108) : この区域の書記長は、1976年に粛清された Ney Sarann aka Ya。この区域は Rattanak Kiri と Mondul Kiri 州、メコン河西域の Stung Treng のいくつかの地域と、Kratie 州のいくつかの地域によって構成され、101、102、104、105、107、505の6つの区域に分割された。

1976年、民主カンプチア政府は Siem Reap-Oddar Meanchey 区域 (区域106) と Preah Vihear 区域(区域103)を自治体区域として設立し、この区域に関しては、全ての報告を区域政府を通さず直接中央委員会にすることを命じた。Kampong Soam (現在の Preah Sihanoukville)はこの自治体区域とは別に組織された。

中央区域は1977年に設定された。この区域は旧北方区域を占有し、新しく設定された北方区域は Siem Reap-Oddar Meanchey 区域と Preah Vihear 区域に移動された。Kratie 区域(区域505)と Mondul Kiri 州(区域105)は北西区域から切り離され新たな自治体区域と定められた。

1976年の民主カンプチア国の区域と地域(資料 : 民主カンプチア文部省) (25)

第六章 「4年計画 : 1977—1980年」

写真 : クメール・ルージュ人員たちの米収穫の様子 (DC-Cam 公文書)

クメール・ルージュは都会生活を廃止し、米産業の拡大を土台にした新たなるカンボジアを築くため、国内の都市を全て空虚にした。1976年初頭、カンプチア共産党は完全なる個人資産の集産化と米栽培を国の最優先方針とした第一次4年計画(1977—1980)を急遽作成した。この4年計画によって、国防の次に集産化が民主カンプチア国の最優先事項となった。

それまでカンボジア国民は集産主義を経験したことはなかった。しかし1976年、全ての国民はそれぞれの個人資産(台所用品に至るまで)を集産的に使用するために差し出さなくてはならなかった。この集産主義の過程のひとつとして、多くのカンボジアの家族は離れ離れ

にされ、他の人達と集団で与えられた任務をこなすことを命じられた。夫婦離散そして子供達までもが親から離れ離れにされた。

この4年計画は1ヘクターにつき3トンの米を生産することを国家目標として設定されたものだった。しかしこの目標は、かつてそのような大規模で米を生産した経験がないカンボジア国民にとって到底不可能なものであった。さらには、カンボジア国内はすでに戦争で疲弊しており、農具、農場家畜そして健康な労働力に欠けていた（26）。

この4年計画はまた野菜植えも含まれており、さらには植林や、畜産、漁業、木材によって収入を得ることまでもが設定されていた。民主カンプチア政府の幹部達は、カンボジアを経済的にも政治的にも完全に独立した国にし、それまでの発展途上農業国という立場から近代的な農業国へと転換することを目指していた。

しかし、幹部達はこの4年計画が引き起こす悲惨さと（過剰労働、栄養失調、貧困、基本的な人権や自由の欠如や病気）計画実行に伴う困難さを無視していた。民主カンプチア時代の間、国民は常に貧困に耐え忍ばなくてはいけなかった。さらに、政府はほぼ全てのカンボジア国民の幸福と尊厳を奪った。殆どの国民は、国の発展のためには教育を受けた人材が必要なことを知っていた。しかし、クメール・ルージュは多くの知識人や技術者を殺害し、さらには全ての大学、学校、教育機関を閉鎖した。そしてクメール・ルージュは経験の殆どない貧しい農民達を、プノンペンにある工場で労働させるために地方から連れてきた。

民主カンプチア政府の指導者達はカンボジアの稲作畑を‘ナンバーワン稲作地域’と単純な‘稲作地域’へと分割した。後者の‘稲作地域’では位置1ヘクターにつき3トンのコメ生産を要求し、前者の‘ナンバーワン稲作地域’では1ヘクターにつき6トンから7トンの米生産が要求された。そしてこの目標生産量はさらに毎年増加した。

写真：クメール・ルージュの女性集団による稲作作業の様子（DC-Cam 公文書）

理論では、収穫物の用途は4つに分割された。収穫物の一部は国民の食料として割り与えられることになっていた：全ての国民は一年間につき318キロの米、つまり一日0.85キロの米を与えられることになっていた。そして残りの米のいくらかは貯蔵用と米の種のために使用されるはずであった。そして最後の一番大きな割り当ては外貨を稼ぐために海外へ輸出され、その外貨で新たな農具機器、生活用品、兵器の購入をすることになっていた。

しかし、政策目標であった収穫量に達成することはなかった為、カンボジア国民の食料用の米や種としての米は分配されることは殆どなかった。その代わりに、殆どの収穫物は軍隊や工場労働者の食料もしくは中国などの社会主義国への輸入へと分配された。

民主カンプチア国では、誰一人として十分な食事を得ることはなかった。殆どの場合、食事はトウモロコシやバナナの薄切り、もしくはパイアの木の幹を米粥に混ぜたものであった。殆どの国民は一日につきミルク缶半分にも満たないほどの米を与えられただけであった。クメール・ルージュの幹部と兵士達だけが調理された米を食べることが出来た。この時代を生き抜いた生存者達全てが、過酷な労働作業や処刑の他に一番よく記憶していることに極端な食料不足を挙げている（27）。

写真：若者による興行（DC-Cam 公文書）

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 21

Phnom Penh に住む 57 歳になる Um Saret は食料を与えられない生活がどれ程つらいかということについて次のように述べている。

1976 年のある日のこと、これ以上の飢えに耐えられなくなった父は、オタマジヤクシを食用に捕まえました。父はそれらがオタマジヤクシとは気づかず、小魚と思ったのです。ある日、一人のクメール・ルージュの党員が毒蛇を殺し、それを柵の上に置き去りにしました。私の父はそれが毒蛇だと知っていたにも関わらず、その蛇を食べ、そして毒によって死亡しました。私の姉と彼女の子供達も飢死しました。私自身の家族も同じような境遇にありました。私達はたくさんの農作業をしましたが、一度も十分な米を食べることは出来ませんでした。あまりにも空腹を感じた時には、野性のアルムを引き抜いて食べました。でもその後、私達は全身にひどい痒みを覚えました。私の子供達はひどく泣きました。ある日、私は魚を採りに行きました。それを見た団体の団長は私にこう言いました。「お前は卑しい性格をしている。気をつけろ！ Angkar がお前を処刑しに連れて行くぞ。」私の子供達の一人はひどい病気になったので私は最後のネックレスを米と交換し、その病気の娘のために米を炊きました。娘はよく食べたのですが、そのあと更に悪化し最後には死亡しました。他の二人の子供と私の主人も栄養失調で病気に罹りました。しかしながら、奇跡的に私達はなんとか生存することが出来ました。

写真：泥を灌漑に運ぶ人々 (DC-Cam 公文書) (28)

第七章 「民主カンプチア時代の人々の生活」

写真：本部の人々（母とその息子）（DC-Cam 公文書）

1. 共同生活の編成

1970 年から 1975 年にの内戦の間、開放地域に住む殆どのカンボジア国民は一組につき 10 から 30 所帯によって構成される、「相互援助組」へと編成された。しかし、この相互援助組は、1973 年あたりから一組数百人ときには村全体から構成される「低レベル共同組合」へと変わっていった。この変化は特に 1975 年のクメール・ルージュ勝利の後に著しく現れ、1977 年までには、一組千所帯で構成される「高レベル共同組合」へと再編成された (29)。

カンプチア共産党の幹部達は、個人資産所有と資本主義を廃止し、農民と労働者の地位を固めるためにこれらの共同体を設立した。クメール・ルージュにとってこれらの共同生活は、人々が一団となって住み、労働に励み、食事を共にし、そしてお互いに余暇を楽しむ生活様式を設立することになっていた。しかしカンボジア人は何千年もの間、家族内のみで食事をするという伝統習慣があった為、これらの共同生活で、食料も乏しい状況の中、他人と共に寝食を共にするという習慣は彼らにとって非常に不愉快で厳しい生活であった。さらには、全てのカンボジア国民はそれまで個人の生産量もしくは仕事の成果の意味でもあった個人資産の所有を集団使用のために諦めなくてはいけなかった。これらの所有物は農具、家畜、鋤、草かき、稲種、土地などが含まれていた。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 22

共同生活システムは、可能な限り自給自足に頼れるよう計画された。クメール・ルージュはこの共同生活システムを国家建設の重要な力であり、民主カンプチアを敵から守るための協力的な防衛壁と表現した。

2. 二つの新社会階級

クメール・ルージュは社会階級のない平等な社会を建設するというスローガンを掲げる一方で、二つの新社会階級を作り出した。クメール・ルージュのこれらの新階級を「基底の人々」と「新しい人々」と呼んだ。

「基底の人々」もしくは古い人々とは、1975年4月17日以前にクメール・ルージュによって支配された地方に住む人々を指す。クメール・ルージュはこのグループを、全ての権利を所有する人々として分類した。このグループは家族親戚内でクメール共和国政権に関わった人々が全くいない人々にであった。彼らはいがいがい貧乏な人々か低中階級(農民もしくは労働者)に属しており、投票権と選挙権が与えられた(しかし民主カンプチア時代、実際の選挙は1976年3月20日のただ一度だけであり、この選挙は国際基準には届いておらず、国民議会のメンバーとして投票した人々は公には発表されなかった)。このグループの人々は共同体のリーダーになることが許されていた。また身内の中にクメール共和国政権に関わった人がいるという人々も、一生懸命労働に励むことで、共同体のリーダーに立候補することができた。

「新しい人々」もしくは「4月17日の人々」とは、1975年4月に都市部から移動した人々のことを指す。しかし実際には、これらのうちの多くは、戦争中に地方から戦火を逃れるために都市へと逃げてきた人々であった。この新しい人々と呼ばれたグループは信用の出来ない連中として、Angkarから憎しみと猜疑心をもってみられていた。彼らはクメール・ルージュ達からパラサイト(寄生虫)と呼ばれていた。クメール・ルージュのスローガンにも彼らのことをこう書いている：

「4月17日の人間は寄生する植物だ。奴等は戦争の負け犬で、戦争捕虜だ。」

また多くの生存者が記憶している別のスローガンには、「奴らを生かしておいても何の得にもならないし、奴らを失ってもなんの損失にもならない。」新しい人々と呼ばれた者達は、基底の人々と呼ばれた者よりもずっと過酷な待遇を受けた。しかし、この過酷さの程度は地域によって違っている。例えば、東区域の Svay Rieng 州と Prey Veng 州の人々は、北西区域の Pursat 州や Battambang 州の人達よりも多少ましな暮らしをすることができた。

Phnom Penh に住む、65歳になる女性 Chap Sitha はこの「4月17日の人々」と呼ばれた一人としての生活を次のように回想している。

1975年の疎開中、私の家族は Kandal 州にある Koh Thom 区域というところへ移動しました。そこで、私は Angkar に野菜の栽培と農作業を命じられました。ある日、夜の9時頃、Angkar が私の主人に勉強しに行けと言いました。私は主人の帰りを待ちましたが、彼は二度と戻っては来ませんでした。村の女性が、私の子供の一人にこう言いました。「もう父親を待つ必要はないよ。それよりも、言葉に気をつけなさい。さもないと、あんたの家族全員が連れて行かれてしまうよ。あんたの父親は

ね、大きな労働履歴があったんだ・・・」(31) 私は主人が Kandal 州の知事だったがために殺されたことを知っていました。2ヶ月後、Angkar は私の Phnom Penh に移るよう言いました。事実、彼らは私を Battambang 州へ連れて行きました。Angkar は私達に朽ちた小屋を与え、その後家族は別々の集団グループで生活しなくては いけませんでした。6歳だった子供だけが、私といることを許されました。Battambang 州での生活は、今でも忘れることが出来ません。そこへ移ってから10日以内に、私の4人の息子と娘が次々と死んで行きました。子供達の何人かは栄養失調と病気で死にましたが、他の子供達は「敵」と疑われて殺されました。その少し後には当時70歳だった義母が栄養失調で死にました。あそこでの生活は本当に恐怖でいっぱいでした。一度もよく眠れた覚えはありません。多くの村人達が Angkar に連れて行かれ、そのまま消えてしまいました。

3. 結婚

民主カンプチア政権下での結婚式は、それまでのカンボジアでの伝統的な形式のものとは全く異なっていた。男女は集団結婚式を行い、その数は少ない時で3組から10組、または30組から50組、時には一度で100組の集団結婚式が行われた。殆どの男女は相手を選ぶことが許されておらず、Angkar が全ての民の親という名目のもと、縁組相手は‘Angkar’によって氏名されると言われてきた。いくつかのカップルは実際に式場に行くまで相手の名前や顔を知ることすらなかった。またこれらの男女の家族は、結婚式に参席したり、相手に関する決定に関わることなどが許されずにいた。(32)

写真：クメール・ルージュの踊りの上演 (DC-Cam 公文書) (32)

また結婚式で、伝統衣装を纏ったり、伝統的な歌やダンスをお披露目したり、宗教的な儀式を行うなどは一切禁じられた。

女性達の中には、戦争で負傷したり手や足を失ったクメール・ルージュ兵士との結婚を強制された者もいた。身体に障害を持った兵士との結婚を拒んだ為に、投獄や拷問を受けたり、または僻地で厳しい強制労働を強いられた女性もいた。また強制結婚を苦に自殺する女性達もいたと言われている。

Kampong Cham 州の Mousa Sokha は、民主カンプチア時代、女性小区域連合の総長を務めた。彼女は当時の様子を次のように回想している：

1974年、私は15歳で、Noh Loas という兵器調達を志した労働者と結婚しました。私達は幸運にも、帝国主義的といわれた宝石で体を装飾することを禁じた新規が制定される一ヶ月前に、結婚式を挙げました。当時は、体の周りを装飾する宝石は、例えそれが偽物であっても、帝国主義的とみなされていました。私達が結婚するまでに、5組から10組くらいの男女が強制結婚させられていました。もし男女が結婚を拒否した場合、彼らは再教育のために召喚されました。新たに結婚した夫婦はその後引き離されました。私の結婚式では、付き添い人に手を取られ、宝石を身に纏うことが出来ましたが、それでも黒い服を着用し、粗末なサンダルを履きました。結婚式から3日後に、私の夫は戦場へと狩り立てられました。なぜなら Angkar が Phnom Penh を打倒するのに、もっ

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 24

と多くの兵力が必要としたからです。1975年にクメール・ルージュが勝利した後、私は村長に強制結婚の数をもっと増やすよう要請しました。翌年、私は最初の息子を産みましたが、誕生から僅か一週間後にその息子は病死しました。（33-34）

写真：クメール・ルージュの結婚式（DC-Cam 公文書）（33の下：34の上）

強制結婚の数は、1975年にクメール・ルージュが勝利した後増加した。一度に行われる強制結婚式のカップルの数をもっと多くなった。Kampong Cham から来た Pheng Hang は彼の結婚式を次のように述べている：

1978年、体制が倒壊するたった一ヶ月前に、クメール・ルージュ達は私の名前をリストから見つけだし、強制的に結婚することを命じました。翌日には、私は式場の席に座っており、彼らが言うことに従うことを決意しておりました。私と妻は、他の160組のカップル同様、二人で共に暮らし一年以内に子供をもうけることを宣誓しました。クメール・ルージュは私達に黒い服と、綿のスカーフを与えてくれ、また式場では食事を摂ることが出来ました。革命後、私と妻は故郷に戻り、5人の子供を授かりました。

結婚式当日、男女は別々の列に立って並ぶことを命じられる。すると村長が、それぞれのカップルのお互いの手を取り、一生共に生きていることを宣誓し、共に頭を垂れるよう命じた。この行為が、彼らが結婚したことを象徴した。そしてこの短い儀式は、食事が出てきた時点で終了する。

結婚式を終えた夫婦は、数日間は共に家に滞在することが許されたが、その後はまたすぐにそれぞれの労働場所に戻ることを命じられた。彼らは7日から10日の間に一度だけ、仕事の後に家に戻り会うことが許された。

クメール・ルージュは伝統的には結婚式を、他の宗教的な習慣や学校や大学での教育を受けているのと同様なものとして見ていた。つまり、それらの行為は、米の生産になんの足しにもならない無駄なものとして見なされていた。集団結婚式が設立されたのは（34）、殆ど時間がかからないからであり、節約された時間を共同労働——クメール・ルージュ内では、これを共産主義中国から得たスローガン「超大躍進政策」という——に費やすことが出来ると目された為である。民主カンブチアの幹部達は、これによって子孫の繁栄を確実なものとし、革命を継続していくことを図った。ゆえに、クメール・ルージュにとって、最大の集団結婚式の目的は、家族形成ではなく、革命に仕える子供達の産出にあった。

4. 子供の権利と労働の乱用

民主カンブチアには、正式な学校というものは存在しなかった。学校の代わりに、子供達は木の下や、民家で勉強した。彼ら彼女らの教師は、基本的な読み書きもままならない貧しい農民達であった。1978年には、いくつかの地域で教育の向上が少しみられたが（これらの地域では、子供達は一日2-3時間の初等教育を受けることができた）、それでも完全に機能している学校は存在しなかった。クメール・ルージュは、「もう学位というものは、それが目に見える功績を示さない限り存在しない。もし大学の学位を取得したいのであれば、ダムや運河でそれを取得して来い。」と言い、「勉強などは重要ではない。重要なのは、労働と革命である。」と主張した。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 25

子供達はアルファベットを教わりながらも、殆どの教育は政治的教訓のために費やされた。子供達は規定通りにクメール・ルージュの教訓を吹き込まれ、将来の兵士・ボディガードまたは使い走りとして働けるように訓練されていった。

民主キャンプチアでは、子供達はまた労働も課された。彼らは肥料を収集したり、小さな農作物を刈ったり、肥料のために人間の糞尿を集めたり、戦闘地に兵器を運び、時にはその過程で負傷をしたり命を落とす者さえいた。また、子供達は親元から引き離され、一度も家族団欒の喜びを味わうことすらなかった。

写真：クメール・ルージュ幹部達の子供達(DC-Cam 公文書) (35)

写真：収穫方法を学ぶ子供達 (36) (DC-Cam 公文書)

Phnom Penh 出身で40歳になる Phin Ratha は1975年に10歳だった当時の彼の経験をこう回想している：

私達は Takeo 州にある Kiri Vong 区域へと疎開しました。Angkar はそれぞれの家族に小さな家を与えました。最初の頃は、私達は蟹や貝などを食料としながら生活しました。しかし、村長との会議の後には、全員が集団で食事をしなくては行けなく、もう蟹を採ることが許されませんでした。あまりにも空腹で、私はたいてい家の周りに植えていた野菜などを盗んで食べました。私は家からずっと離れた場所で、他の子供達に混じって労働することを命じられました。Angkar は3-4ヶ月に一度だけ家族を訪問することを許可しました。私の任務は稲作での労働でした。しかし、私はこの業務が嫌でした。なぜならヒルが怖かったのです。私が所属する青少年部隊のリーダーは、私をよく殴りました。それで私は何度も家まで助けを求めて逃げたのですが、家族は私を助けることなど出来ませんでした。なので森に暫く身を潜めました。その間、私は野生の植物や果物、それから村人の食べ物を盗んで、なんとか命をつなぎました。しかし、そのようなひどい生活に耐えられなくなり、再び家へ戻りました。しかし Angkar からの報復を恐れた家族は、私をもとの労働組へ戻しました。そこでは、同じリーダーが私を拷問をし、二度と逃げ出さないよう警告しました。私は野菜を掘り起こす業務と家畜の糞を集める作業を言いつけられました。ある日、とても疲れていたために、私は転倒し、家畜の糞をこぼしてしまいました。そのため、例のリーダーは私を鞭で何度も殴り、それが私の目に当たりました。目が経つにつれ、私の目は痛みを増し、ついには視力を失いました。(36)

クメール・ルージュは教育に関するスローガンがあった：

「Angkar は木陰を学校や集会所にする」
「人民は労働の間、学ばなくては行けない。働けば働く程、人はもっと学ぶことが出来るんだ。」 (36)

Phnom Penh 在住の Ros Sampeou はクメール・ルージュ政権時代に家族全員を失っている。彼は当時の記憶をこう語る：

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 26

私には5人の家族がおりました。私達家族は Battambang 州の Preh Net Preh 区域にある Tra Loak 山へと移動しました。そこで私と他の子供達は土を掘り起こしたり、土手を作ったり、家畜の面倒を見たり、小さな作物を刈る作業を言いつけられました。私達は与えられた任務を完全に終了しなくてははいけませんでした。さもないと食料の配給がカットされ拷問を受けるのです。私の父はマラリアで亡くなりました。姉は病気が元で腹部が膨れ上がり死亡しました、。ある日仕事から帰ってくると、一人の男が、私の母が Angkar に殺されたと教えてくれました。私はそれを聞いて、涙が出てきました。もう何も感じないと思いました。そして自分はあとどのくらい生き延びれるのかと考えました。私のたった一人残った家族であった兄は突然、なんの跡形もなく失踪しました。

幼い子供達は「Angkar が全ての子供達や青年達の親であり、もし親が子供を殴ることがあれば、それは Angkar を見下しているという意味であり、Angkar はそのような親に対しなんの容赦もしないのだ。」と教わった。これに伴い共産党員達は子供達に自分らの親をスパイすることを命じた。またこれらの子供達は、もし Angkar がそれを望むのなら、自分の親を殺すことも厭わないのだとも教え込まれた。月日が経つにつれ、子供達は Angkar のみが親であり、Angkar の命令には絶対服従しなくてははいけないのだと信じるようになってしまった。

1977年から1978年の対ベトナム戦では、多くのカンボジア兵士が重傷を負ったり、命を落とした。その為、クメール・ルージュは子供達を前線へと送り込み、何千人の子供達までもがそこで負傷したり、命を落とした。

5. 強制労働

民主カンブチア時代の国民は皆労働を与えられた。幼い子供達は軽い仕事を、そしてお年寄りには子供達や家畜の面倒、それに籠を作る作業などが与えられた。14歳以上の大人達には一番難しい労働が課せられた。彼ら彼女らには、運河や貯水建設のための土掘り、土手の建設、農作物を植えるための土壌整備、それに稲作作業などが与えられた。その他で、党の人間に信頼された2・3千人の男女は、Phnom Penh にある工場で働いた。（37）

写真：クメール・ルージュの党員達(DC-Cam 公文書)（37下）

写真：灌漑建設完成を祝う人々（DC-Cam 公文書）（38上）

殆どの人々が週7日、一日12時間、全くの休憩や十分な食事をする事なく労働に就いた。朝日が昇ると同時に働き出し、月夜が明るければ、真夜中まで働くこともあった。月光がない夜は、焚き火の炎の下で稲作作業を行った。もし誰かが、共同作業所のリーダーに与えられた任務について文句を言ったり質問をしたりすると、たちまち[革命の敵]呼ばわりされ、「再教育」へと送り込まれた。また繰り返し同じ間違いを犯した者は、処刑された。これらの行為は民主カンブチアの憲法と矛盾していた。憲法は次のように制定していた：

カンブチアの全市民は常に、物質的・精神的・文化的な生活を享受する完全なる権利を与えられる。

- 全ての職工人は、彼ら彼女らの工場の雇用主である。

- 全ての農民は、彼らの道路そして畑の所有者である。
- 全ての賃金労働者は、勤労の権利がある。
- 民主カンブチアでは、絶対に失業者は存在しない。

6. 粛清そして大量虐殺

クメール・ルージュ達は敵が至る所にいると信じ込み、それらの人間を探していた。疑われた人間は、CIA（米中央諜報局）やKGB（ソビエト秘密警察）それからベトナムのスパイといった虚偽の罪によって非難された。（38）

1977年から1978年にかけての対ベトナム戦は、大規模な粛清へとつながっていった。Pol Potが中国から戻ってきた1977年後半、ベトナム軍がカンボジア東部へと侵攻した。数ヶ月後、ベトナム軍は何百人のカンボジア市民を連れて撤退した。クメール・ルージュ達はカンボジア東部に住む人々を、ベトナムに協力したとして責め、多くの人々が逮捕され処刑された。その中には、長い間クメール・ルージュ擁護派だったSo Phimのような人々もいた。

カンボジア東部のいくつかの労働部隊が、民主カンブチア政権に対し反乱を起こした後の1978年に、最悪の粛清がこの地域で執行された。まだ対ベトナム戦が続いていた6月から9月にかけて、この東部では、反乱軍と民主カンブチア政権の間で紛争が起り、約10万人の人々が処刑もしくは紛争によって命を落とした。政府は南西区域から反乱軍と戦わせるために、軍を送り込んだ。何千人もの人々が、この軍の手を逃れる為に、ベトナム国境へと逃げ込んだ。

粛清は1977年に、北部地域でも行われた。この地域での粛清は、教育を受けた人々と、1976年初頭まで北部の長官として使えたKoy Thuonと関係のあった人々に集中して行われた。粛清の間、Angkarは情宣伝相のHu Nimや、Koy Thuonの指導者でもあったTiv Olと、彼の同僚だったPhok ChhayやDoeunを含む多くの人々を逮捕した。民主カンブチア時代には、いくつかのクーデターや反乱（特にチャム・モスラムによる）¹⁵などがあったが、それらは全て不成功に終わり、さらに内側に潜む敵の発見を激化し、国内全体での粛清へと発展していった（39）。

写真：灌漑プロジェクト。この写真はクメール・ルージュの役人が訪れた際に撮られたもの。（DC-Cam 公文書）（39）。

写真：灌漑のために水を引く女性クメール・ルージュの労働部隊(DC-Cam 公文書)（40上）

Kampong Cham州に住む、74歳のSan Teimnahは、反乱の際にどのようにクメール・ルージュが少数民族のチャム、特に自分の家族を殺害したかを話している：

Sangkum Reastr Niyum 政権時代、私の村には何千人ものチャム族の家族が住んでおりました。クメール・ルージュはこれらのチャム族の殆どを殺害しました。私の村やKoh Phalに住む

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 28

人々は、クメール・ルージュに対して抵抗した為、他の人々よりも多くの苦難を味わいました。私の家族では、両親と、私の子供のうち二人、それから私の祖父母と親戚全てが殺されました。息子の **Musa** は、抵抗運動の後にどこかへ連れて行かれ、そのまま行方が分からなくなりました。後に、息子が私を探している最中に殺害されたと聞きました。1978年のことだったそうです。娘の **Rofiah** と娘婿、そして二人の子供達は理由が分からないままに殺害されました。

その後、クメール・ルージュ達は私の家族を **Stoeung Trang** 区域にある **Sre Veal** 村へと移動させました。最初、彼らは私に大きな木を、**Phnom Penh** から疎開してきた人々と共に伐採することを命じました。けれども我々は上手くその作業を行うことが出来なかったので木が上に倒れてきて死んだ者がたくさんいました。その後、私は豚の飼育を命じられました。けれども私は豚が怖かったので、その命令を拒否しました。しかし彼らは、命令に従わないと **Angkar** は教育に送り込むぞと脅し、その業務を強制しました。クメール・ルージュは豚肉を食べることも強制しましたが、私はそのような肉を子供時代から一度も口にすることがないのだと言って拒否しました。彼らは、私に他の食料を与えてはくれませんでした。せめて塩だけでもと頼みましたが、彼らは塩の配給は全て、その豚のスープに入っているのだと言いました。私の体は栄養失調のために膨れ上がりましたが、幸運にもなんとか政権が終わるまで生き残りました。1979年に、私は故郷へと戻りました。(40)

第八章「警備組織」

1. 警備センター

写真：クメール・ルージュの子供党员

民主カンプチアでも、1978年に東部区域であった肅清が一番惨かったが、その他の地域でも何十万という人々が逮捕され、その多くの人々が殺害された。クメール・ルージュの警備組織は、200箇所以上の刑務所に及び事実上国内至るところに設置されていた。クメール・ルージュはこれらの監獄を「警備事務所」や「警備センター」または「刑務所」と呼んでいた。

警備センターは5つのレベルに分かれて組織されていた。これらの刑務所は、抑留、尋問、そして処刑に使われていた。(41)

下位から3つのレベル(3. 地方、2. 区域、1. 小区域)の刑務所では、**Lon Nol** 政権時代の公務員やかつての兵士達が収容されており、他の刑務所には窃盗罪を言い渡された者や、逃亡者、**Angkar** の悪口を言った者が収容されていた。また地域レベルでの警備センターには、千人以上の囚人が収容されていた。これらのセンターではクメール・ルージュの兵士やその家族、またそれぞれの区域内で犯罪を犯した者を収容していた。一番上の警備組織は、**Phnom Penh** の中央センターで、暗号名が **S-21** と呼ばれていた。ここに収容されていた殆どの囚人は、クメール・ルージュの党员や兵士で、革命の裏切り者とみなされた者達だった。

一番下位の警備組織では、囚人達はあまり厳しい罰を受けることなく、たいていは警備センターから労働収容施設へと送られた。そこで囚人達は、家を建てたり、野菜を植えたり、食事の支度を命じられた。これらの囚人の多くは1976年前には警備センターから釈放されていた。しかし、地域・区域レベルの刑務所に収容された者の殆どは釈放されることはなかった。そして S-21 からは殆ど生還する者がいなかった。

2. Angkar の敵

クメール・ルージュは革命とカンボジアの全国民が純粋になることを望んでいた。ここでの「純粋」とは精神性と経歴においてである。貧しい農民達は、もっとも純粋な革命家になると信じられていた。そして農民以外の国民を、クメール・ルージュは疑っていた。その為、ささいな違反行為を行ったり、厳しい労働に対して不平を言ったり、食べ物を盗んだ者達は敵と見なされ、処刑リストに載せられた。クメール・ルージュは敵を「内部の敵」と「外部の敵」を次のように分別した。

「内部の敵」は、「新」や「4月17日」と呼ばれる人々や、前政権時代に要職についた人間で資本主義者や封建主義者とされた人々のことである。この分類には、クメール民族でない者も含まれていた。これらの内部の敵とされた人々は、他の何よりも党センターと言われる党幹部を恐れていた。¹⁶内部の敵と標的にされた人々は次の人々であった：

クメール共和国政府の役人達：1975年に、クメール・ルージュは何千人もの即決処刑を行った。これらの処刑者は、クメール共和国政府のリーダーや兵士がいた。Lon Nol に仕えた者は全て死の標的となった。また彼らの家族や親戚も殺害された。幸運にも、Lon Nol 政権時代の公務員や兵士で、上手く身分を隠し、しばらくの間生き延びた者の中には民主カンプチアが倒壊するまで生存した者すらいた。

少数民族：革命を実行するために、クメール・ルージュは前政権と全く関係がなかったクメール族の人々を優遇した。そしてカンボジアに住んでいた全ての少数民族は信頼できない者達とみなし迫害した。（42）

写真：Tuol Sleng の使い走り（DC-Cam 公文書）（42）

山地原住民：カンプチア共産党のリーダー達は、政権を取る前は北東区域の谷に住む人々と共に生活していた。クメール・ルージュ達は、これらの人々の忠誠心の厚さを見出し、深く信頼していた。これらの谷に住む人々のうち幾人かは、クメール・ルージュのボディガードとなった。しかし、政権が彼らを引き続き尊敬し、信用すると主張したにも関わらず、1972年初頭には、彼らの多くを Mondul Kiri 州の彼らの住む場所から Koh Nhek 区域へと移動させた。そこで多くの人々は命を落とし、また移動を拒んだ人々は処刑された。

Mondul Kiri 州に住む、Pnong 族の Phsos Prai さんは、クメール・ルージュ時代に移住させられた後に辿った彼の家族の経験を語っている：

私の15歳になった姪は、他の場所でなど暮らしたくないと泣いたため、銃殺されました。私は家族から引き離され、あちこちの農場で働かされました。移住先の Koh Nhek 区域では、人々は満足に食事も与えられず朝から晩まで働かされ、皆

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 30

極度に疲労していました。私の娘は、赤ん坊を産んだばかりというのにカサーバしか食べる物がなかったので、娘婿は他の村へ行って8缶の米と一羽の鶏を集めてきました。しかし小区域リーダーは、それを個人的に食べたとして、娘家族全員を逮捕しました。Lam Tik 村では、蜂の巣を他の人と分けずに食べたとして、二人の人が逮捕され殺されました。

チャム・モスラム：クメール・ルージュはチャム民族が村を捨て、固まらずに分散してクメール人達と共に暮らすことを強制した。また彼らはが民族固有の言葉を話すことや、イスラム教を信仰することを禁じた。クメール・ルージュはチャム民族の **Hakims** と呼ばれるリーダー達の多くや、政権の政策に反抗するとみなしたチャム民族全てを殺害した。(43)

写真：独立記念碑の前に立つクメール・ルージュの兵士達(DC-Cam 公文書) (43)

さらに、チャム民族は彼らのイスラム教で禁じられている豚肉を食べることも強要された。民主カンプチア時代に、何万人ものチャム民族が過酷な労働や、病気、飢えによって命を落とした。¹⁷

ベトナム人：カンボジアに住むベトナム人は、少数ながらカンボジア人と結婚したベトナム人以外は、全員1975年に国外追放された。しかし1977年から1978年にかけて、これらの僅かに残っていたベトナム人もカンボジア政権に組織的に殺され、ほんの僅かな人々しか生き残ることが出来なかった。彼ら彼女らは、ベトナム人という理由だけで標的にされた。

中華人：このグループの人々はたいてい企業家であったが、民主カンプチア時代は、地方での農作業へと強制的に刈りたてられた。中華人は任務に失敗すると、厳しい懲罰を受けたが、ベトナム人とは違い、選び出されて処刑の標的になりことはなかった。

写真：食堂での共同体的食事風景 (DC-Cam 公文書)

知識人：クメール・ルージュのリーダー達のうち、幾人かは高等教育を受けていたが、基本的に教育を受けた他の人々を、潜在的な敵であり、カンボジアを外国勢力の操り人形にした退廃的な社会階級とみなしていた。民主カンプチア時代、何千人にも教師や大学学位保持者が処刑された。これらの知識人の多くが処刑される中、生き残るためにわざと無教養のふりをする人々もいた。彼らは自分達の知識と専門職を隠すことで生存することができた。

技師であった **Pin Yathay**、彼の著書「息子よ、生き抜いてくれ」(Stay Alive, My Son)で当時の経験を克明に記している。1975年の都市撤退の間、彼の18人の家族は何度も移動させられ、最後にはプルサットにたどり着いた。家族の中で唯一の生存者となった **Pin Yathay** は、1977年初頭にタイへと逃げる事が出来た。彼は自分が生存できた理由のひとつに、技師としての身分を隠したと書いている：

ある日、Pursat 州にある **Veal Vong** という森で、村長がいつものように退屈な集会を開きました。そこで村長は「**Sihanouk** 王子が帰国され、新政府を創ろうとしている。なので **Angkar** は、専門家や教育を受けた人、医者、技師、学生それに前政府時代の軍司令官達に、‘専門家名簿’に登録するよう呼びかけている。」と言い、それら

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 31

の地位についてた者がいるかどうか手を挙げさせました。それまでずっと以前軍人だったことを隠していた人々も含め、約40人くらいの人々が手を挙げました。しかし、私はそこで手を挙げるべきかどうか迷い、結局手をあげないことにしました。その後、誰もその40人についての消息を聞きませんでした。後に村人達は口々に、「きっと奴らのように、以前高官だった者や専門家達はみなクメール・ルージュに殺されたんだよ。」と噂していました。(44)¹⁸

裏切り者と疑われた人々：クメール・ルージュの多くの党员も革命を裏切ったとか、ベトナム軍に寝返ったなどと嫌疑をかけられた。また一般の人々さえも、些細な間違いを犯しただけで、革命の裏切り者と非難された。よくある嫌疑は、たいていグループのリーダーの許可なしに家に戻ったりとか、台所用品を壊してしまったとか、Angkar について批判的な意見を述べたりとか、仕事に遅刻したとか、十分な労働をしなかったとか、生活環境に不平を述べたりとか、宝石をつけたり、性的関係を持ったり、親戚や友人の死に悲しんだりとか、宗教的に感傷的になったりという理由からであった。また過労や栄養不足で病気になった者に対しては、怠け者とか仮病者といって非難した。これらの人々は跡形もなく消息不明になった。民主カンブチア時代、命じられた任務よりも少ない労働をすると、死へとつながった。クメール・ルージュのスローガンは「Angkar の命じることは完全に実行する！共産党员よ、手抜きをするな！」

「外側の敵」とはアメリカやその同盟国のタイや他の社会主義国、特にベトナムとソビエトのことを示す。クメール・ルージュは、これらの外国勢力がカンボジアを侵略し植民地化を企んでいると考えていた。クメール・ルージュは、自分達の党员や兵士すらも、これらの外国の政治思想に仕えているといつて非難した。クメール・ルージュは、これらの人々を「内側に潜む隠れた敵分子」とみなした。この中には、アメリカの影響で、社会主義国に反対する国から来た者や、修正主義者、ソビエトのような覇権国、それにベトナムとその同盟国の人々も含まれていた。彼ら彼女らはたいてい、米中央諜報員やロシアの秘密警察、またはベトナム軍の手先として告発された。クメール・ルージュは、外国語を話せるカンボジア人も他国のスパイとし、この虚偽は地元当局が気に入らない人間を処刑する際に便利な言い訳として使用された。

写真：クメール・ルージュ党员達が野外作業から帰ってくる様子 (DC-Cam 公文書)

3. 逮捕と投獄

1976年終わりから1977年初頭にかけて、潜伏している裏切り者を探し出すことが、クメール・ルージュの主要な活動となった。村人達は、「他人の行き先をどう探りあてるのか知らなくてはいけなし、そしてアンカの全てを報告せよ！」というスローガンのもと、お互いに監視をするようになった。また監視や密告者による報告書の他に敵を見つけ出す方法として、自らの伝記や告白を何度も書かせるということもあった。

もし敵が見つかった場合、敵の名前は小区域もしくは区域委員会へと報告され、逮捕される。アンカはめったに公の場所で誰かを捕まえたりはしない。その代わりに、共同体のメンバーの誰かが敵と疑われた場合、役人は彼らに「アンカがお前を更なる教育に来よう招待しているぞ。」と告げた。その後、これらの人々は、彼ら彼女らの嫌疑に関する満足な調査なしに

投獄され、殆どの場合処刑された。クメール・ルージュは「一人の敵を見逃すよりは、十人の無実の人間を逮捕するほうがいい。」と、冤罪を正当化した。

4. 尋問と拷問

比較的軽い嫌疑をかけられて投獄された人々は、たいてい飢餓や病気、それに手荒い扱いによって苦しめられた。(45)

写真：共同生活集会所でのクメール・ルージュ党员達 (DC-Cam 公文書) (46)

多くの人々が命を落としたが、幾人かの囚人は拷問を受けることすらなかった。しかし、クメール・ルージュの警備組織でも最高レベルの警備センターS-21では、拷問や尋問は常に行われた。

Cho Sophea は、民主カンプチア時代 Kampong Cham 州に住んでいた。彼は1977年5月に何の理由も与えられずに逮捕された。彼はどう逮捕されたか、また Tbaung Khmum 区域にあった刑務所での状況を述べている：

ある日、4人の兵士が私の所属する共同隊にやってきて、丁寧な物腰で私に電気を接続するのを手伝ってくれないと言いました。私が出かける用意をして出てみると、奴らは銃を突きつけて、私を縛りました。彼らはそれから私を刑務所に入れたのです。40日後、私は拷問センターへと移されましたが、そこでの時間は刑務所よりも過酷なものでした。刑務官達は、私に自白させるために電気ショックを使用したり、時には殴打することもあり、私は何度も気を失いました。しかし、どんなに拷問がきつくても、私は絶対に罪を認めませんでした。その後、私はまた別の尋問センターへと移され、そこで12日間過ごしました。しかしそこでは、私は拷問も尋問を受けることはありませんでしたが、体は痩せ細っていきました。それから3日後に、彼らは「Angkarは混乱しているようだ。」と言い、ここで起こった事は決して口外しないこと、もし誰かに質問されたら、「俺は何も見なかったし、何も聞かなかったし、何も知らない」と答えることを約束させられ釈放されました。¹⁹

5. 処刑

民主カンプチア時代、恐らく50万人近い数の人々が革命や国家に対する犯罪を起こしたという理由で処刑された。何千人という‘新しい人々’と呼ばれた農業の経験も技術も全くない人達は消えていった。都市から遠く離れた森や畑へと連れて行かれた人々は、そこで失敗をしたり、上司を怒らせたりし、殺害された。何人かの人々は、生きたまま埋められ窒息死した。(46)

教育を受けた人々はほぼ例外なく殺された。誰もメガネをかけたり、外国語を話そうとはしなかった。なぜなら、それらな教育を受けた人間の象徴とみなされていたからである。特に都市に住んでいた多くのカンボジア人は、自分らの過去や才能を隠し、読み書きが出来ないふりをして過ごした。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 33

処刑は様々な方法で行われた。革命の裏切り者や敵と言われた人々は、尋問センターに連れて行かれ、数ヵ月後そこで過ごした後、‘キリング・フィールド’と呼ばれた場所へ移動し、そこで大量墓地と化した穴の淵に跪くことを強制された。処刑執行人は、これらの囚人の後頭部をシャベルや、クワ、棒などで殴り殺した。また時には集団銃殺も行われ、100体にも及ぶ死体が埋まる大量墓地にさらに死体を埋めた。その他にビニール袋を使って窒息死させることもあった。井戸が森に多くある田舎では、囚人達はトラックで井戸まで運ばれ、そこで殴られ、突き落とされた。

時には、家族の一人による失敗や間違いのために、家族全員が即決処刑されることもあった。クメール・ルージュの共通句でもあった「雑草をつむぐには、根こそぎ引き抜け」という言葉通り、彼らは家族全員を処刑するために探し出した。

Koh Kong 州の Mam Phai Boun は、彼の4人の家族メンバーが殺された時のことをこう述べている：

私の7歳になる姉は、とうもろこしを盗んだという罪で Angkar に殺されました。彼女はクワで殴られ、死体はとうもろこし畑のそばに埋められました。ある日の午後、私が牛と共に森を歩いていると、死体が腐ったような臭いがしてきました。それで、私はそれが本当に死体なのか確認するために臭いの方へと歩きました。それは首が殆ど落ちかかるほどに切られた父の変わり果てた姿でした。その横には同じような状態で殺された二つの遺体がありました。2ヵ月後、私の祖母が子供から米かゆを盗んだと言って責められ、こん棒で撲殺されました。祖母の遺体は、藁で包まれてから埋められていました。数日後、今度は私の母が栄養失調と過労で亡くなりました。私は母の遺体を抱きしめながら、気が狂いそうになるほど泣き続けました。(47)²⁰

写真：子供の集団（撮影者 Elizabeth Becker 47）

第九章「S-21：トゥール・スレング監獄」

写真：Tuol Sleng（Tuol Sleng 博物館公文書）

民主カンプチア時代、最も重要な刑務所は S-21（警備事務所 21）と知られる所だった。‘S’という文字は ‘Security’（警）を表し、21 という番号は Phnom Penh 南部（Sangkat Tuol Svay Prey）にあること所在地の暗号であった。

S-21 は囚人の拘留や、尋問、拷問、殺害のために存在した秘密の刑務所であった。1976 年の中旬後には、誰一人釈放された者はいない。恐らく 1 万 4 千人近い囚人がここで拘留されていたが、民主カンプチアが崩壊するまで生存した者はたった 12 人足らずである。これらの生存者達は、投獄されながらも、S-21 に役立つとみなされた人達で、修理工や画家、彫刻家などがいた。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 34

1 建物

S-21 は昔、Chao Ponhea Yat 高校だった。(48) 1962年に建設され、学校の塀の裏には草ぶき屋根の二つの木造の建物があり、そのうちのひとつが Boeng Keng Kang 小学校だった。しかし、この敷地内の建物全てが S-21 として使用された。

民主カンブチア時代、Tuol Sleng は波形の鉄板と電気ワイアーで覆われていた。その中に4つの主要建物があった。一階にある教室は0.8×2 m 四方の小さな独居房に分割された。そして二階の8×6m 四方の部屋は、集団拘置所として使用された。3階にはさらに広い部屋があり、そこでは40人から50人近くの囚人を拘束していた。また一部屋は S-21 所長の Duch という男のオフィスとして使用され、他の部屋は書類作成や運営作業にあてがわれた。そして近くの民家は尋問や拷問に使われた。

2. 囚人達

S-21 の囚人達の殆どは、党や革命の背信者や、またすでに逮捕された裏切り者の党員の為に働いていたという嫌疑をかけられた者ばかりだった。カンブチア共産党のリーダー達は、だんだんと自分達の兵士や党員にまで猜疑心を持つようになり始めていた。例えば1976年10月、Pol Pot は幾人かの党の高官達を逮捕し、警備をさらに強化するために S-21 へと送り込んでいる。クメール・ルージュのリーダー達は、国の至る所に敵を見つけ出し、毎月何百人という党員を逮捕していた。また囚人の中には、約400人くらいの国民党員も含まれていたが、彼らの殆どがベトナム人だった。

Tuol Sleng で働いていた者の中にも、後に囚人になった人間がいた。彼らは書類作成を怠ったり、機械や他の器具を壊したり、尋問中に許可なしに囚人を叩き殺してしまった罪状を告白した。しかし、この刑務所で引き出された罪状の殆どは、無実の人々が拷問の末に話したもので、ゆえに殆どが真実ではなかった。

写真：S-21 で働くクメール・ルージュの看守達とその家族(DC-Cam 公文書)

Kampong Chhnang 州の Khiev Cheh (別名 Peou) は S-21 の看守だった。彼は当時の様子をこう話した：

1977年、私の友人であった Hong と Meoun は間違いを冒し、連れて行かれ殺されました。Angkar は彼らの友人だったという理由で私も逮捕し、Prey Sar へと送り込みました。彼らはそこで、私とその二人の友人と何らかの関わりがあるかについて尋問しましたが、私は「ありません」と答えました。尋問者の名前は Sem Phal といい、彼は私が一生懸命働き、忠実なことをよく知っていました。そのお陰で、私は数ヶ月半で釈放され、その後は502区分へ送られ、そこからベトナム戦のために、Tay Ninh へとトラックで武器を運ぶ仕事をしました。(49-50)

S-21 での生活はひどいものでした。私達は互いに話すことを堅く禁じられており、例え相手が親しい友人であっても、誰かを信用するということが出来ませんでした。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 35

そこでは、皆一生懸命働きました。看守の他に、私は野菜を植えたり豚を飼ったりしていました。我々は常に任務に対し細心の注意を払わなくてはいけませんでした。なぜなら、例えば居眠りをしたりとか、壁に寄りかかるなどの些細な間違いや失敗でも、あの場所では死へとつながりかねなかったのです。

3. 規律

刑務所敷地内は、至る所に10個の規則が書かれた紙が黒板に貼られて置いてあった。

S-21に於ける SANTEBAL (警備警察) の規則

1. 囚人は質問にのみ答え、決して質問を逸らしてはいけない。
2. 言い訳や弁解をするために、事実を隠してはいけない。囚人が反論することは固く禁じられている。
3. 囚人は革命を転覆しようとしたのだから、騙そうなどするな。
4. 囚人は質問に対し、思い返そうなどと時間の無駄なく、速やかに答えること。
5. 囚人は己の革命論や不道徳性について話さない。
6. 鞭打ちや電気ショックを受けている時は、決して泣き叫ばない。
7. 動くな。静かに座り命令が出るのを待て。何も命令がなくても沈黙を保て。命令には、文句を言わず速やかに従うこと。
8. 囚人は自分の背信者という立場を隠すために、Kampuchea Kromを言い訳として使うな。
9. 囚人がこれらの規則のうちひとつでも怠った場合、鞭打ちと電気ショックの刑を受ける。
10. 囚人がこれらの規則に対し反抗した場合、10回の鞭打ちと5回の電気ショックを与える。

‘B-C-D’という建物には、他の規則が貼ってあった。

‘B-C-D’ビル内での注意書き

1. 相手を知っていようがまいが、決して誰かと接触するな。
2. 何かをしたければ、必ず看守からの許可をもらう。
3. 各自の部屋では、音を立ててはいけない
4. 看守や他の誰かが来た場合は、必ず眠ること
5. 検査の間は、両手を後ろに組むこと。決して逃亡しない。

4. 監獄状態

囚人達はS-21に到着すると、写真を撮られ、自分の幼少時代から逮捕されるまでの生い立ちを詳細に話すことを要求された。囚人達は下着一枚にされ、所有物は全て没収された。それから彼ら彼女らは独房に連れて行かれ、鎖で壁やコンクリートの床につながれた。大きめの監獄に入れられた者達は、足を鉄の柵に鎖でつながれた。足かせは交互の柵につながれ、眠る際には頭を反対の方向に向けて横たわった。囚人達はマットレスや毛布のない床で眠り、互いに話すことを禁じられた(50)。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 36

写真：共に食事をするクメール・ルージュの看守達（Tuol Sleng 博物館公文書）

Van Nath は数少ない S-21 の生存者の一人で、当時の刑務所での生活をこう振り返る：

S-21 で、私は他の 30 人以上の囚人と共に長い金属の柵に足をつながれました。私達囚人はスプーン 4 杯分の粥と葉の入った水っぽいスープが食事でした。互いに話すことは堅く禁じられていました。座ったり水を飲みに行くのも、必ず看守から許可を得なくてははいけませんでした。もしそれを怠ると、ひどい殴打を受けるのです。4 日に一度、私達は体を洗うことが許されました。看守達は下の階からホースを持ってきて、それを出入り口から囚人に向かって吹き付けました。ドアから遠い所にいる者は、水を受けることができませんでした。毎日、誰かが尋問に呼ばれましたが、二度と戻って来ない囚人もいました。そして新たな囚人達が次から次へとやって来ました。²¹

毎朝早朝 4 時半に囚人達は検査のための裸になることを要求された。看守達は足かせがゆるくなっていないか、また自殺に使われそうな物などが隠されていないかを調べる。実際、何人かの囚人が自殺を図っていたので、看守達はさらなる自殺防止のために足かせや独房室の中を隈なく調べたのである。

S-21 は非常に不衛生だった為に、殆どの囚人が水虫や発疹、のみに悩まされた。しかし刑務所には、これらの病気のための薬などはなかった。S-21 には医療スタッフがいたが、彼らは医学のトレーニングを受けておらず、囚人達は尋問中に怪我をした際、彼らを生かすためだけに治療を施すだけだった。（51）

囚人達が別の部屋へ尋問のために移動する際、必ず顔は隠された。そして看守と囚人の間での会話も禁止された。また刑務所内では、違うグループに所属する人々の間で言葉を交わすことも禁じられた。

5. 尋問

S-21 では自白を得るために、厳しい方法が取られていた。囚人達は手や木の枝、棒などで殴打された。また時には、ワイヤーでの鞭打ちや電気ショックを使うこともあった。他の拷問方法としては、針で刺したり、一日中囚人の手や足を吊るし上げたり、糞尿を強制的に食べたり飲んだりさせたりした。その他にも、ナイフで体を切りつけたり、ビニール袋で窒息させたりした。また他の自白を引き出す方法として、傷口にアルコールを注いだり、爪を剥いたり、頭を水につけたりなどもあった。幾人かの囚人は拷問最中に死亡している。

写真：クメール・ルージュ党員達（DC-Cam 公文書）

女性の囚人達は服を脱がされたり、胸を切り落とされたりという方法で拷問を受けた。また性的虐待は民主カンプチアの規則で禁じられているにも関わらず、彼女達は尋問者達に強姦されることもあった。強姦者は見つかるかと処刑された。

自白の際、囚人達はそれぞれの生い立ちなどを話すよう要求された。党のメンバーだった者は、自分達が革命に参加したこと、そして民主カンプチアでの任務を説明することを命じ

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 37

れた。それから囚人達は年代順に、言われている背信行為を述べなくてはいけなかった。自白書の3項目には、囚人がやったと言われる挫折した陰謀や背信行為に関する言葉が書かれていた。そして終わりには、囚人の知り合いや友人、同僚達の名前が列挙されていた。その中には100にも及ぶ名前リストもあった。これらのリストに載った人々は、その後尋問のために招集された。

S-21での拷問があまりにも惨かったため、多くの囚人達はやってもいない犯罪まで自白してしまった。貨車部門で働いていた **Um Samnang** は、彼の所で列車製造者として働いていた **Ton** という人物と交わしたという背信の会話を無理やり自白させられた人物である：

Ton は年長の労働者でした。彼は他の同僚達と同様、革命に満足していませんでした。毎日、彼は次のような宣伝文句を配布していました：

- 俺が殆ど全ての技術を教えたものだから、奴らは俺を追い出そうとしている。
- もしこの行為を止めなければ、お前は水に溶ける塩のように消されるぞ。
- 年長の労働者は、奴らにとっては土に落ちて大根みたいなものだ。奴らは好きな時に、それらを踏み潰せるんだ。
- 奴らは、威張ることと理論を話すことしかできなくて、まったく実用的ではない。
- 俺は米のためにのみ働いている。他に何が傷つかろうが、関係ない。²²

さらに **Ton** は、外側からの兵士が戦っている間に、革命相手に戦うことすら準備していました。

Kampong Thom 州の **Baray** へと移動した **Chea Hoeung** 教授は、**Tang Lonh** という男と背信的な活動をしたことを告白している：

Tang Lonh が自分の村を立ち退く時に、革命に抵抗するためにと同僚を集めました。そこで彼は次第に次のような破壊工作を私達にさせました：

彼は自分の徒党たちに、牛達に米を食べさせるために解放するよう命じました。それから、食器類をひとつひとつ壊すよう命じました。そして一羽か2羽の鴨を殺して、それがすでに死んでいたと報告するよう言いました。そして、彼は自分の家をパンフレット製作場所にして、そこから仕事場に運んで配りました。²³

写真： **Tuol Sleng** の刑務官達が共同で食事を取っている様子（**Tuol Sleng** 博物館公文書）
(53)

6. 組織形態

千人くらいの間人達が S-21 に関わる仕事をしていました。そのうち700人が通常の職員で、刑務所の食料を育てる人も入っていた。他の人々は内部の雇用者で、3つの分かれていた刑務所で働く事務所職員も含まれていた。

S-21は書類保管部署、防衛部署そして尋問部署に分かれていた。書類保管部署は、自白のテープレコードを文書化したり、囚人の自白が手書きされているものをタイプしたり、自白の要約を書いたり、これらの書類を保管する業務を任されていた。写真に関する小部署では、囚人が到着した際の写真、尋問最中に死亡した囚人の写真、それから処刑後の重要人物であった囚人の写真を撮ることが任されていた。何千もの写真が保管されていたが、まだ何千という写真が見つからずにいる。

S-21では防衛部署が最大の部署であり、この部署での看守達の殆どが10代だった。多くの看守達は、部署の規則を厳しいと思っていた。看守は囚人と話したり、名前を訊いたり、殴ることを禁じられていた。彼らはまた尋問中に、それを観察したり盗み聞くことを禁じられた。この部署では居眠りをしたり、勤務中に座ったり壁に寄りかかったりすることを禁じた30個の規則があり、これらを厳守しなくてはいけなかった。彼らは常に歩き、見回り、そして全てのことに注意を払わなくてはいけなかった。看守でも間違いを冒した者は、逮捕され、尋問を受け、投獄され、そして最後には殺された。ゆえにS-21の看守達は常に、間違いを冒して自分達までもが拷問にあい殺されることを恐れていた。

尋問部署では、‘熱い部署’と‘冷たい部署’そして‘噛み砕く部署’というものがあつた。‘暑い部署’（ここでは‘冷酷部署’とも呼ばれた）では拷問場所として使用された。それとは対照的に‘冷たい部署’（‘慈悲的部署’とも呼ばれた）では、自白目的に拷問することを禁じられていた。しかしここで自白を得られなかった場合、囚人達は‘熱い部署’へと送られた。‘噛み砕く部署’では、難しく重要なケースが扱われた。

この刑務所では何時間にも及ぶ長い尋問が行われた。時には、尋問が夜にまでもつれこむこともあつた。尋問部署の看守達は、みな読み書きが出来、たいてい20代の若者達だった。

Duch（本名 **Kaing Guek Eav**）：1945年 **Kampong Thom** 州に生まれる。彼は **Sisowath** 高校時代に国内数学大会で準優勝している。その後、**Kampong Thom** で数学教師として勤める。1964年、**Son Sen** が都市を逃げた後、**Duch** は教師訓練所の役員として任命される。1970年にカンボジア共産党に入る。**Duch** は1980年代にクメール・ルージュを離脱し、キリスト信者になる。1999年5月に逮捕。以来、彼は刑務所に入り裁判を待っている。2005年2月、彼は民主カンボジア時代に犯した戦争犯罪と外国人に対する障害罪で起訴された。2006年、彼の健康状態が悪化する。

Son Sen（別名 **Khiev**）ベトナム南部にある **Travinh** 州で1930年6月12日に生まれる。妻の名は **Yun Yat**（別名：**Att**）は民主カンボジア時代文化教育相。**Son Sen** は1950年から1956年にかけてフランスに留学し、そこでフランス共産党に入る。1963年、警察の手から逃れるためにジャングルへと身を隠す。1971年カンボジア人民解放軍の長官になる。民主カンボジア時代、**Son Sen** は3番目の副首相で国防担当をしており、またS-21を直接責任者だった。1977年6月10日、彼とその家族は **Pol Pot** の命令によって殺害される。（54）

S-21での指揮者は **Duch**（S-21所長）、**Khim Vat**（別名 **Hor**: S-21副所長）、**Peng**（看守長官）、**Chan**（尋問所長）そして **Pon**（尋問者）だった。**Pon** は、**Keo Meas**、**Nay Sarann**、**Ho**

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by **Khamboly Dy**. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 39

Nim, Tiv Ol そして Phok Chhay のような重要人物の尋問にあたった。これらの指揮者達は皆元教師であった。

8. 処刑

S-21 の殆どの囚人達は 2 - 3 ヶ月拘留された。しかしそのうち元クメール・ルーージュの幹部だった人物は数ヶ月間拘留される者もあり、彼らの供述書は何百ページにも及んだ。刑務所に着いてから 2 - 3 日後には、真実の解明とは無関係な尋問をされた。彼ら彼女らは、言われた通りの背信行為や犯罪を認めなくてはいけなかった。尋問が終わると、囚人達は処刑を湾曲する意味の言葉「粉壊」もしくは「放棄」という刑罰を受けた。

S-21 が作られた最初の年は、死体は刑務所近くに埋められた。しかし 1976 年の終わり頃までには、もう死体を埋める場所がなくなったため、囚人達は夜にトラックで Choeng Ek (Phnom Penh から 13 キロほど南西にあった場所) へ連れて行かれ、そこで斧や棒で殴り殺されたり、銃殺された。処刑後は囚人達を連れてきた兵士の手によって、遺体は集団墓地に埋められ、その数は 6 体から時には 100 体にまで及んだ。

Tuol Sleng は 1979 年に、ベトナムの援助の下、カンボジア人民共和国政府によって虐殺博物館となり Choeng Ek は祈念館とされた。

写真：クメール・ルーージュ党员達 (Tuol Sleng 博物館公文書) (55)

第 10 章：外交関係

写真：民主カンボジアのリーダー達と外国使節団 (DC-Cam 公文書)

民主カンボジアは中国、北朝鮮、ベトナム、ラオス、キューバ、ルーマニア、ユーゴスラビア、アルバニア、そしてエジプトと外交関係があった。Phnom Penh には、これらの国々の大使館があり、中国以外の国々との外交に関しては、あくまでも大使館内でのみ行われた。

民主カンボジアの大使館は、中国、北朝鮮、ベトナム (1977 年 12 月まで) とラオスにのみあった。これらの国のうち、中国と北朝鮮は友好的で、ラオスも比較的友好的な姿勢を保った。しかしベトナムとの関係は、国境に関する争いや、異なった政治的思想がもとで次第に悪化していった。殆どのカンボジア共産党リーダーは反ベトナム的で、かつてベトナムに住んでいたことのある者や、ベトナム人と関係のあった党员は粛清にあった (Son Sen と Ieng Sary は例外)。粛清にあった人々は「カンボジア人の体にベトナムの魂を持つ」人間として非難された。この二国間では、民主カンボジア海域にある海底油田の所有権でも争いがあった。(56)

カンボジア共産党は、ベトナムから Kampchea Krom の土地を取り戻したがっていた。²⁴彼らは、またベトナムの「インドネシナ」という考えを嫌っていた。

ベトナムと民主カンボジアの衝突は 1975 年に勃発した。その後すぐに、Tral 島 (ベトナムでは Phu Quok と呼ばれる) 場所で深刻な争いが始まった。1976 年中頃、民主カンボ

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 40

チは中国と関係を強化し、その結果北京がカンボジアを援助し、それに対抗するようにモスクワがベトナムを援助するようになり、カンボジア対ベトナムの争いは次第に、中国対ソ連のライバル関係の一部と化していった。

1976年末までには、民主カンプチアは中国から大規模な軍事援助をもらっていた。1977年、民主カンプチア軍は国境にあるベトナムの村を攻撃した。1977年12月、ベトナムとカンボジアの外交関係は終わりを告げた。

Ieng Sary (別名: 同志 **Vann**) : ベトナム南部にある **Vinh Binh** で1930年に生まれる。**Khieu Thirith** と結婚。1950年、フランス留学の奨学金を受け、その後フランス共産党に入る。1957年に帰国し、カンボジア人民革命党に入る。彼は1963年にジャングルへ逃げるまでの間、**Kampchaboth** 高校で教師として勤める。後に北東区域の軍指揮官になる。

1976年、最初の外交副相に任命される。彼はまた中央委員会と常任委員会のメンバーでもあった。1996年、**Ieng Sary** はカンボジア王国政府へと寝返える。彼は現在自由の身でカンボジア国内で生活し、彼の息子 **Ieng Vuth** は **Pailin** 州の副知事をしている。

1978年、民主カンボジア政府は外国関係を拡大し、貿易は当時のピークを記録した。貿易相手として知られている国は、中国、北朝鮮、タイ、日本、香港、マダガスカ、バングラディッシュ、シンガポールと言われている。カンボジアの主な輸出品は米、ゴム、材木、珍種の動物の一部(皮、牙、外皮)で、主な輸入品は兵器や戦車、大砲、農具機械、化学用品や衣服だった。

殆どの輸出品は中国へと渡った(しかしこの数も1970年以前に比べると非常に少ない)。中国は当時のカンボジアに唯一影響力のある国でもあった。1977年から1978年終わりにかけて、中国はカンボジアに何百台の戦車、車、重兵器、何万発の銃弾や砲弾、そして6機の戦闘機を供給した。中国はさらに、**Kampong Chhang** に新たな軍用の空港を建設するために、**Phnom Penh** と **Kampong Saom** をつなぐ鉄道の修理も申し出た。これらの軍需品や貿易の他に、中国は何千もの中国人の顧問や技師達をカンボジアへ送った。これらの中国人達はクメール・ルージュ党员達に交戦術や医療サービス、工場操作などを訓練した。民主カンボジアは中国軍にベトナム戦の援護を頼んだが断られ、その代わりに戦争停止と交渉することを薦められたが、カンボジアはこれを拒否した。

写真: 民主カンボジアのリーダー達と外国使節団 (DC-Cam 公文書) (57)

第十一章「民主カンプチアの陥落」

写真: 動き回る子供達の一団 (DC-Cam 公文書)

1. なぜ民主カンプチア政権は倒れたのか: 3つの理由

衰弱した国民達: 民主カンプチア時代の4ヵ年計画は、1ヘクタールにつき3トンの米を産出することが目標とされていた。その数字は革命時代以前の生産量の2倍に及ぶものだった。しかし産出量が割り当て量に満たなかった時、国中の党员達は虚偽の産出量を報告するよう

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 41

になっていた。そしてこれらの党員達は、できるだけ多くの米を党中央部に送り、国民は飢えに耐え忍ばなくてはいけなかった。

民主カンブチア政権下では、秘密主義が国中を覆うようになり、そのため1ヘクタールから3トンの米を生産するなどという計画を実行することは困難になっていった。それぞれの区域は、他の区域でいったい何が行われているのか皆目検討もつかずにいたし、党中央部から誰かが来て、人々がどのような暮らしをしているかや、どのような管理のもと党員達が働いているのかを見ることもなかった。(58)

写真：子供達の団体 (DC-Cam 公文書) (59)

下位の党員達が、党にとって都合の悪い報告をすることを恐れていたのに対し、上層にいる党のリーダー達は、下から上がってくる報告書をそのまま鵜呑みにしていた。カンブチア共産党員達は、党が失敗や間違いを冒すなどあり得ないと信じていたのである。彼らにとっては、都合の悪いこと全てが背信者か外国人の仕業であった。その間、人々の生活状態は悪化し、何十万という人々が飢えや過労で命を落としていった。

粛清：1976年中ごろ、カンブチア共産党幹部の多くが粛清された。その頃から、Pol Pot と彼の仲間達は、党の幹部に対する反乱はいつもどこかで企まれ、ゆえに敵は国中至る所にいると信じるようになった。そのため、多くの区域担当のリーダーや、軍の指揮官達が逮捕され処刑されていった。そしてこの状況は、1977年に Pol Pot が東区域の党員達の暗殺を命令し、そこに住んでいた殆どの人々も粛清にしたことによって、さらに悪化していった。1977年後半にベトナム軍が侵攻した後、東区域に残っていた人々は、皆ベトナム軍の支援に回ったとみなされ、彼らに対し「カンボジア人の体に、ベトナムの魂を持つ連中」というレッテルを貼られるようになった。ゆえに、カンブチア共産党が東区域に兵を送った時も、何万というこの区域の住民が死んだまま置き去りにされた。何百人という人々が東区域からベトナムに逃げ、そこでベトナム軍の援助を得て軍隊を編成した。

ベトナムとの衝突：これは民主カンブチアの崩壊の最も決定的な要因であろう。1975年、民主カンブチア軍はベトナムに対し散発的な攻撃を開始した。そして1977年中ごろ、クメール・ルーージュがベトナム領地の Chaudoc, Hatien、他の州を砲撃し、多くのベトナム市民や攻撃態勢に入らなかったベトナム兵を殺したことによって本格的な攻撃が開始された。(59) 何千人ものベトナム人がベトナム領土の内陸地へと逃げ、2・3日続いた攻撃の間に約千人のベトナム市民が怪我をしたり命を落とした。

1977年12月、ベトナム軍はカンボジアに対し軍用飛行機と大砲を使って攻撃を開始し、Svay Rieng 州にある Parrot's Beak と知られていた地帯を攻略した。それを受けて、民主カンブチア政府はベトナムとの外交関係を断ち切る決断をし、Phnom Penh にいたベトナム大使館員達に国外撤去を命じた。クメール・ルーージュは、ベトナム軍がカンボジア領土から撤退しない限り、国境問題に関する交渉にはつかないことを表明した。その後間もなく、ベトナム軍は何千人ものカンボジア市民と捕虜達を連れて撤退した。その後、この2カ国間での交渉が行われることはなかった。

写真：Kratie 州のクメール・ルーージュ解放区にあった写真館に飾られた二人のチャム・モスラムの党員達 (DC-Cam 公文書)

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 42

ベトナムは、クメール・ルージュによる二国間国境付近の8つの州に対する攻撃を非難した。またベトナムは、反クメール・ルージュの人々を応援し反乱を起こさせることを考えた。そこでベトナムは、ベトナム内でこれらの反クメール・ルージュのカンボジア人に軍事訓練を与え、新しいカンボジア政権の中枢を編成し始めた。ベトナムとカンボジアは1978年を通して戦闘状態にあった。

1978年4月3日、ラジオ・ハノイ放送局がクメール語で、カンボジア人に民主カンプチア政権に立ち向かうことを訴えた。ベトナムはさらに国内に逃げてきたカンボジア人を選別し、ベトナム軍の指導のもとに軍事行動をする部隊を作った。これらのカンボジア人の殆どが東部区域にいた党员、兵士、そして住民達であった。この時までには、東部区域のいくつかの地帯はベトナムが支配しており、それ以外の場所は他の反クメール・ルージュの抵抗勢力に支配されていた。

1978年12月3日、ラジオ・ハノイはカンプチア国民救済統一戦線の設立を発表した。²⁵

これは、1978年後半にベトナムへ逃げこんだ Heng Samrin 党员が指揮を取った。
(60)

1978年12月25日、ベトナム人将校 Van Tien Dung は民主カンプチアに対し大規模な攻撃を開始した。彼の軍隊は Kratie 州を5日以内に、そして Kampong Cham を一週間以内で手中に収めた。そして1979年1月7日、ベトナム軍とカンプチア国民救済統一戦線は共に Phnom Penh を獲得し、その後すぐにカンボジア全体を制圧した。彼らは直ちに、カンプチア人民革命審議会を Heng Samrin の指揮のもと、カンボジアの州議会として設定するための会議を開いた。

2. 結果

1979年初頭、ベトナムは Phnom Penh に新たな政権編成を支援した。その結果、カンプチア人民共和国 (PRK) が設立され、1999年にベトナム軍が撤退するまでの10年間、カンボジアを統治した。民主カンプチア政権の幹部達と兵士達は、Phnom Penh から北西区域へと徒歩や列車、トラックなどを使って逃避した。その際に、彼らは何十万という人々を強制的に連行した。二番目の強制撤退の間に、多くの人々が飢えや病気、怪我で命を落とした。

また多くの人々が、自分達の故郷の村へと戻って行き、Sihanouk 王子とその家族は、飛行機で中国へ避難した。

Ta Mok (本名: Chhit Choem) : Takeo 州に1926年に生まれる。数年間仏教徒として生活。彼の妻は Uk Kohem。夫婦の間には4人の子供がいる。1949年、Ta Mok は Takeo 州の Issarak 区域の長官を経て、1963年に共産党员になる。1968年から1978年の間、南西部地域書記として務める。1978年11月、Ta Mok は民主カンプチア共産党の副書記長に任命される。民主カンプチア政権崩壊後も、彼は恩赦の申請もしなければ、党を離脱することもなかった。1999年3月、彼はタイ国境付近でカンボジア軍によって捕まり、投獄される。2006年7月21日、病死。

政権崩壊後、クメール・ルージュは、タイとの国境付近で党の活動組織を設立、タイや中国などから軍事支援を得ていた。1990年まで、国連は、カンブチア人民共和国（PRK）と他の社会主義国からの反対意見があったにもかかわらず、国連総会で民主カンブチア政府の代表にカンボジアの席に着く事を許してきた。

1979年、クメール・ルージュは‘偉大なる人民連帯・愛国・民主統一戦線’の編成を発表したが、人々を惹きつけることは出来なかった。同時期に、Sangkum時代（1955年から1970年）に首相を務めた Samdech Son Sann によって非共産主義のクメール人民解戦線（KPNLF）も設立された。²⁶

その後すぐに、Sihanouk 王子の下、‘独立・中立・平和・協力的カンボジアのための人民共同戦線’（FUNCINPEC）も創られた。1982年、これらの3つの政党は王子を大統領、Khieu Samphan を副大統領、そして Son Sann を首相という構成のもと、民主カンブチア三派連合政府（CGDK）を設立した。CGDK の決意は「カンブチアをベトナムから解放するために、共同で戦うこと」であった。CGDK 内ではクメール・ルージュが最大席を占め、この政府が国連でのカンボジアの議席に就いた。（61-62）

何年にも渡る交渉のあと、1991年10月23日、ついに対立してきた全ての政党間で平和協定が結ばれ、国連移行期当局の監視（UNTAC）のもと、国民投票を行うことを承諾した。しかし、クメール・ルージュは、国連が組織した選挙をボイコットし、自分達の軍を解隊することを拒否した。その後も、クメール・ルージュは何年にも渡り、1993年の選挙で選ばれた Norodom Ranariddh 第一首相と Samdech Hun Sen 第二首相とするカンボジア王国政府と戦い続けた。

1996年8月、Ieng Sary が、他のクメール・ルージュの部隊を連れて、カンボジア王国政府に変節した。1998年には、Ke Pauk, Nuon Chea, Khieu Samphan などの他のクメール・ルージュの幹部達も離脱した。1998年に Pol Pot が死去した後は、Ta Mok だけがカンボジア政府に変節することを拒み続けた党幹部であったが、彼は1998年3月に拘束された。それまでには、生存していたクメール・ルージュのリーダー達は全員降参するか逮捕されるかしており、かれらの活動は完全に崩壊した。クメール・ルージュの統治下にあった区域に住む人達は、カンボジア王国の一員として再結合された。

写真：1979年1月クメール・ルージュ敗退後に我が家へと戻る生存者達（Tuol Sleng 博物館公文書）（62）

写真：このクメール・ルージュの文書と、この書類が見つかった区域から発見された他の書類には、民主カンブチア政府に関する様々な情報が書かれていた。これらの文書には、どのようにして、そしてどのような理由で、多くの人々が命を落としたのかについて書かれている。ある意味、これらの書類ひとつひとつが、クメール・ルージュの手によって命を奪われたことの象徴である。このような文書は百万枚以上に及ぶ。（DC-Cam 公文書）（63）

終章

民主カンブチアの歴史は20世紀史上、人類に対する最大の悲劇、そして重大犯罪の一つである。この政権は、約二百万人の犠牲をもたらし、何十万人という未亡人や孤児を残した。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of “A History of Democratic Kampuchea (1975-1979),” by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 44

何万人という人々が国を離れ、避難民となった。そしてクメール・ルージュと政府軍によって、何百個という地雷が埋められ、1980年以来何千人という人々がこれらの地雷によって命を落としたり、手足など体の一部を失っている。カンボジア国民の多くの人々が、家族を失い、そのことによって精神的なダメージを負っている。これらのことが今日のカンボジアの貧困の原因のひとつとなり、国民を苦しめている。

クメール・ルージュのリーダー達は、中国、ソビエト、ベトナムなどの共産主義の思想を、極端な解釈によって考えを構築していき、人々の人生などを全く無視した政策決定をし、抑圧そして大規模な虐殺を引き起こした。カンプチア共産党のリーダー達は、革命のみが、カンボジアを独立と平等な国にする手段と信じていたのである。そして彼らは、人々の集団化、都市撤退、4カ年計画、長大躍進などにみられるように、中国やソ連から多くの政策や考えを真似ていたにも関わらず、自分達の革命は他国の思想などを一切採用していないと主張した。

クメール・ルージュは教育に全く価値を見出さなかった。ゆえに、ほんの一握りの高学歴リーダーを除くと、殆どの党员達は国を統治する経験など全くない人間ばかりであった。殆どの下位にいた党员は、全く読み書きが出来ないか、多少読める程度の人ばかりだった。これらの障害にも関わらず、彼らは短い期間で大きな成果を遂げたいと考えたが、彼らには自分達が決定した政策が引き起こすであろう結果や、国の資源などを一切熟慮することはなかった。彼らはカンボジアの国全体を稲作地帯にし、そして国民全員を農民か Angkar の囚人にしてしまったのである。

基本的な権利やニーズは完全に無視された。個人で所有していた物は全て没収された。宗教、貨幣、伝統は全て何の意味にもならないものとなった。そして海外との関係も完全に絶たれてしまった。政権は、リーダーや政策に関する些細な批判も許さなかった。クメール・ルージュ達は教育のある人間、前政権の役人達、そして自分達の政策に反抗した者達全てを国家の敵や革命の背信者とみなした。クメール・ルージュはカンボジア全体を巨大な拘留所とし、それは次第に、自分達の党员や幹部を含む200万人もの人々の大量墓地と化した。

(64)

付録

S-21 の看守達に対する規則

1 敵を取り締まるための規則

- 勤務中に腰を下ろしたり、壁に寄りかかったり、何かを書いたりしない。前後方向に歩け。
- 監視中、絶対に敵の名前などを尋ねてはいけない。
- 監視中は、持ち場を離れてはいけない。非番の人間は絶対に、囚人部屋のドアを開けて侵入したり、質問をしてはいけない。
- 独居房内で、囚人達に質問してはいけない。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 45

- 囚人達を殴打したり脅したりしてはいけない。囚人の態度に問題があった場合は、担当の看守に直ちに口頭か文書で報告する。
- 囚人が鍵を壊したり、手首や首を切ったり、釘を飲み込もうとした際は、まずその囚人の両手を後ろ手で縛り、直ちに責任者の看守に報告する。
- 囚人が脱走した場合、直ちに捕まえる。
- 監視中は、党に割り当てられた通り「50人編成軍隊」からの党員がいること
- 監視中、党員達は昼寝をしたり、腰を下ろしてはいけない。常の歩き回り取締りをする事。
- 監視中は、党員も兵士達も必ず指示された通り点検を行う。24時間以内に午前6時と11時、午後6時と11時の4回に渡って点検をすること。
- 点検後、部屋を出る前に、看守は全ての囚人達が適切に衣服を着用するのを待つこと。
- 囚人全員が服を着用していることを確認し、一人でも服を脱ぐような者が出ないよう監視すること。
- 監視中、責任者の看守は自分で鍵を持ち歩くと。鍵の管理を決して怠らないこと。そして絶対に鍵を失くさないこと。万一鍵を失くした際は報告し、ドアを壊さずに、鍵を見つけ出すこと。囚人が逃げた場合、担当看守は皆の前で責任を取ること。
- 監視中は、兵士の制服を着用すること。短パンの着用や、シャツを脱いだりすることは許可しない。(65)

II. 鍵と足かせについて

- 錠を開けている際は、足かせと目隠しを外す前に、必ず鍵と足かせ、鉄柵などの点検をすること。
- 錠を開けている際は、足かせと鉄柵を外に出し、決して内側に置いておかないこと。
- 糞尿を捨てるために囚人が出る際は、手錠と足かせをつけ、囚人のそばを共に歩くこと。
- 尋問室から囚人が出る時は、囚人の体、足かせ、鉄柵を隈なく点検すること；シフト交替の時も同じように点検すること。
- 鎖は短くしておくこと。50センチが最長。特別な場合が生じた際は、上司の党員からの決定を仰ぐこと。

III. 警備対策

- 牢屋にいる囚人達が互いに話すことを禁じること。
 - S-21 で、囚人達が言葉を交わすことを禁じること。
 - 建物内の監視を任された者が、外を出歩くことを禁じる。囚人達が互いに連絡をし合ったり、交流しないよう常に監視せよ。
 - それぞれの建物に、囚人の名前と牢屋のナンバーが書かれたリストがあること。
 - 監視中は、銃弾は弾倉から抜いておくこと。銃に弾薬入っていた場合は、銃弾を入れておくこと。
 - 部屋の中にいる看守は、銃を持つことは許されないが、その代わり棒を持つことを許可する。
 - 誰が銃を所持しているのかを確認し、保持者は責任を持つこと。
 - 銃保持者は常に自分で銃を持ち歩き、決して外に置き去りにしないこと。
 - 銃を囚人の傍に置いたり、囚人の傍で持ち歩かないこと。
 - シフトや任務を交替する時は、必ず交替でやってきた看守に囚人や刑務所の状態を報告すること。
 - シフトを交替する時のみ、看守は糞尿容器を外に持ち出し捨てるのが許される。この作業は交替に来た看守の任務である。それまで勤務についていた者は、交代でやってきた看守がその任務を終えて戻って来るまで待機しなくてはならない。
- (66)

参考文献

記録文書資料

著書で使用した資料の殆どは、世界最大規模で民主カンブチア時代の原文資料を保管している Documentation Center of Cambodia から選出されている。参考文献と選ばれた文書の中には次のようなものが含まれている：

- クメール・ルージュ党员達の自伝
- S-21 で殺害された人々の名簿と供述書
- 民主カンブチア憲法と政策
- 革命旗と革命青少年（民主カンブチア刊行）

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 47

- カンプチア共産党常任委員会集会の議事録
- 民主カンプチアの標語と歌
- 民主カンプチア時代の地図
- 民主カンプチア時代に撮られた原版写真
- 多種に及ぶ過去のカンボジアの政権時代に使用された教科書

この他の資料として、Documentation Center of Cambodia 月刊誌の「真実を求めて (Searching for Truth)」からの記事、民主カンプチア時代年表、ニュース・クリップ、インタビュー、そしてクメール人作家協会とカンボジア記録センター共催で行われたコンテストの応募作エッセイが含まれている。(67)

出版物と論文

*原文をそのまま入れる (Insert the Original Ones)

注

¹ 民主カンプチア時代の犠牲者の数は様々である。カンプチア人民共和国政府 (1979-1989) が行った調査で、330万人に人々が犠牲になったという報告がある。歴史家 Ben Kiernan は自身の著書「Pol Pot Regime: Race, Power and Genocide in Cambodia under the Khmer Rouge, 1975-1979」(1996年イェール大学出版)で、彼が1980年に行った500人(その内100人は1979年にフランスへ避難; 残りはカンボジアに残った者)との証言を基にすると、およそ150万人の死者が推定されると述べている。その後、Ben Kiernan は人口統計上での計算をすると、さらに死者の数は170万人近いと発表している。米中央諜報局は「カンプチア: 人口統計的悲劇 (1998年5月)」報告書の中で、犠牲者は140万人と推定されると書いている。歴史家 Michel Vickery は、1975以前と1979以降の人口数の比較を基にすると、民主カンプチア時代の死者の数は74万人とし、この数は天災による死者の数よりも少ないと述べている (1998年 Cambodia from 1975 to 1982, Bangkok: O.S. Printing House)。

² インドシナはフランスの植民地だったカンボジア、ラオス、ベトナムに与えられた名称。第一次インドシナ戦争は、ホーチミンを指導者としたベトナム抵抗運動 (ヴェト・ミン) 対フランスで1946年から1954年にかけて争われた。この紛争はベトナム全土を巻き込み、さらにはカンボジアとラオスにまで拡大していった。

³ この党はホー・チミンが香港に住んでいる間に組織された。最初はベトナム共産党という名称だったが、1930年2月にインドシナ共産党と改名された。

⁴ フランス植民地への抵抗を強めるのと、人々からの支援をもっと得るために、1951年、ベトナムはインドシナ共産党をインドシナを構成する3つの国をそれぞれ代表させるため、党を3つに分割した。

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 48

⁵ 正式名はベトナム独立共同戦線で、ヴェト・ミンはホー・チミンによって1941年にフランスからの独立を目指すために創設された。

⁶ この協定は1954年ジェネバ会議で書かれたもので、インドシナ領土での紛争を停止し、平和を再構築しいた。

⁷ Tou Samouth に失踪に関する理由は、未だにどの文書でも明らかにされていない。

⁸ DC-Cam のカタログ D24008 「カンボジア民族統一戦線・王国民族連合政府の構成」(Composition of the Royal Government of National Union of Cambodia)によると以下のようになる：
Penn Nouth (首相) Khied Samphan (副首相・国防相) Sarin Chhak (外務相) Hou Youn (内務・農村改革・共同体相) Hu Nim (情報宣伝相) Chau Seng (特別任務相) Chan Youran (人民教育青年相) Ngo Hou (公共衛生・宗教・社会問題相) Thiounn Mumm (経済財政相) General Duong Sam Ol (軍需品・兵器管理相) Huot Sambath (公共労働・電話・復興相) Chea San (裁判・司法改革相) Keat Chhon (閣僚議会議使節相) Thiounn Prasith (国民解放闘争調整相) H.R.H. Nordom Phurissara (地位不定の相) Kong Sophal (国防副相) Poc Deuskomar (外務副相) Van Piny (外務副相) Sok Thouk (内務・農村改革・共同体副相) Tiv Ol (情報宣伝副相) Ieng Thirith (人民教育青年副相) Chou Chet (公共衛生・宗教・社会問題副相) Koy Thuon (経済財政副相)。これらの殆どは名前だけの地位であった。共産党書記長 Pol Pot と副共産党初期 Nuon Chea で司られた常任委員会のみが決定権を握っていた。

⁹ クメール・ハノイとは、1950年代以来からベトナムに住み、1970年から1975年の紛争時にクメール共和国政府と戦っていたクメール・ルーージュを援助したクメール民族のことを指す。

¹⁰ 政権を握る前、クメール・ルーージュは「超背信者」とみなしていた Lon Nol 政府の高官のうちトップ7人のみを死刑に処すと布告した。この高官とは Lon Nol 大統領 Sisowath Sirik 王子 Matak, Long Boret 首相, Cheng Heng, In Tam, Sosthene Fernandez と Son Ngoc Thanh であった。

¹¹ 1977年7月11日に発行された DC-Cam のカタログ D01266 「Office 870: Angkar と党という言葉の使用に関する手引き(Instruction on the use of the word Angkar and Party)」 。これによると「Angkar もしくは党という言葉は個人ではなく組織を表しているものである。個人に関しては、黨員もしくは、どれだけの地位にある黨員、何らかの組織代表している黨員と呼ぶ。例として Teng 黨員、党書記長、組織支持の黨員などである。

¹² Chanda, Nayan. *Brother Enemy: The War after the War*. New York; Macmillan Publishing Company 1986.

¹³ Nayan Chanda によると、1979年1月2日、ベトナム奇襲部隊は、Sihanouk 王子を誘拐し、王子にベトナム支援のもと民主カンプチア政府の抵抗運動の指揮をさせる企みで、皇居の目の前にあるメコン河を渡った。しかし、この計画は挫折する。ベトナム奇襲部隊が Phnom Penh に近づくと緊張感が高まり、Khieu Samphan は王子をタイ国

Translation Disclaimer: The Documentation Center of Cambodia does not warrant the accuracy of this unofficial translation of "A History of Democratic Kampuchea (1975-1979)," by Khamboly Dy. While every effort has been made to ensure its consistency with the original, portions may be incorrect. Any person or entity who relies on or cites to information in this translation does so at his or her own risk. Only the English and Khmer versions of this book may be cited as authentic originals. The translation supported by a grant from Peacebuilding project of the Ministry of Foreign Affairs, Royal Government of Belgium with the core support provided by the U.S. Agency for International Development (USAID). 49

境近くの Sisphon という場所へ連れ出した。その2日後、彼は王子にベトナム軍は撤退したと話して、Phnom Penh に連れ戻した。1月5日、Pol Pot は王子を招き、ベトナムの侵略行為に対抗するために、国連からの支持が必要なこと、そのために王子の国連総会では民主カンプチアを代表して出席して欲しいことを伝えた。その見返りとして、Pol Pot は、Ieng Sary が皇族全員を人質として国内に軟禁することを考えたにも関わらず、王子に、皇族全員の国外脱出を許可すると伝えた。1月6日、王子と皇族は中国の飛行機に乗って、中国へと向かった。

¹⁴DC-Cam・カタログナンバーD21227。1976年4月11-13日「第一回人民代表総会」。人民代表総会の常任委員のメンバーは以下の通り：Nuon Chea（大統領）Nguon Kan（第一副大統領）Peou Suo（第二副大統領）、そして他にはRos Nim、Sar Sean、Mei Chham、Kheng Sok、Matt Ly、Thang Sy、Ros Preapがいた。民主カンプチア国家最高会議常任幹部会のメンバーは以下の通り：Kieu Samphan（大統領）So Phim（第一副大統領）Nhim Ros（第二副大統領）。大臣協議会のメンバーは以下の通り：Pol Pot（首相）Ieng Sary（第一副首相・外務相）Vorn Vet（第二副首相・経済相）Son Sen（第三副首相・国防相）Ho Nim（情報宣伝相）Thioun Thioeun（厚生相）Leng Thirith（社会問題相）Touch Phoeun（公共労働相）Yun Yat（文化教育相）。これに加えて、民主カンプチアは他にもいくつかの組織を設立した。例として、Chey Suon が指揮する農業委員会、Cheng An 担当の工業委員会、Koy Thuon 担当の商業委員会、Phuong 党員担当のゴム・プランテーション委員会、Mei Brang 担当の交通委員会とエネルギー委員会などがある。これらの6つの委員会は経済担当の副首相の監督下に置かれ、それぞれの委員長は大臣と同等の地位にあったが、一度も完全には職務活動をしなかった。

¹⁵ Ysa, Osman. *The Cham Rebellion: Survivors Stories from the Villages*. Documentation Series No. 9, Phnom Penh: DC-Cam, 2006

¹⁶ 中央政党とは、カンプチア共産党が、政府高官と権限のある大臣を呼ぶ際の名称。例として、この委員会には中央委員会、常任委員会、そして軍などが含まれていた。

¹⁷ Osman Ysa のリサーチによると、民主カンプチア時代に40万人から50万人のチャム民族が死亡したと推定されている。この数は、カンボジアでのチャム民族数に関する統計を収集していた、イスラム教指導者達とのインタビューを基に計算されたものである。このイスラム教指導者達によると、1975年以前は70万人近いチャム民族がいたとされ、しかし1979年以降にはたった20万人から30万人しか残らなかった（Oukoubah: 「民主カンプチア政権下でのチャム・モスラム民族のための正義」 ”Justice for the Cham Muslims under the Democratic Kampuchea Regime” カンボジア記録センター、2002）。歴史家 Ben Kiernan は、1979年までにはチャム民族の人口は26万人に増えたと述べ、ゆえに1979年以降のチャム民族の数は17万3千人と結論づけている。この数によると、民主カンプチア時代に8万7千人のチャム民族が死亡していることになる「Pol Pot Regime: Race, Power and Genocide in Cambodia under the Khmer Rouge, 1975-1979」（1996年イェール大学出版）。

¹⁸ Yathay, Pin. *Stay Alive My Son: A Real Tragedy in Khmer Rouge Regime* (クメール語訳) SIPAR edition, Phnom Penh 2003.

¹⁹ Chou Sophea, “Why I was Imprisoned”. このエッセイは、2004年4月 DC-Cam とクメール人作家協会共催のコンテストで銀賞を受賞したものの。

²⁰ Mam Phaiboun “The Remaining Life and the Shadow of the Past”. このエッセイは、2004年4月 DC-Cam とクメール人作家協会共催のコンテストで4位を受賞したものの。

²¹ Vann, Nath. *A Cambodian Prison Portrait: One Year in the Khmer Rouge’s S-21*. バンコク White Lotus 1998.

²² “Ton, train section worker” DC-Cam ・ カタログナンバーD 02831

²³ “Tang Lon, a former worker in Ministry of Post, later a first lieutenant in charge of salary distribution, and now working in Chi Ok village, Baray district” DC-Cam ・ カタログナンバーD02845.

²⁴ Kampuchear Krom とはクメール帝国の南方領土で、現在のホー・チミン市〔クメール語では Prey Nokor と知られる）。Kampuchear Krom はフランス植民地時代は、Cochin China と呼ばれていた。フランス植民地政府は、この領土を1949年にベトナム領土として移した。この地域のいくつかの場所には、比較的多くのクメール人が住んでいるが、これらの殆どはベトナム系の人々である。

²⁵ 1978年12月2日、民主カンプチアへの対抗運動者達が Kratie 州の Snoul 地域というところで、その後の‘国家建築と防衛集会統一戦線’の前身ともなる‘カンプチア国民救済統一戦線’の結成を発表するために集会を開いた。2百人あまりの人々がこの集会に出席し、Heng Samrin 大統領、Chea Sim 副大統領、Ros Samay 書記長を筆頭とした14人のメンバーで構成される戦線中央委員会を承認した。

²⁶ Samdech Bavasetha Son Sann は1911年にカンプチア Krom で生まれる。彼は Sangkum Reastr Niyum 政権時代の1967年5月から1968年1月まで首相の座にいた。1980年代、彼は‘クメール人民救済戦線’と呼ばれた対抗運動を指揮した。パリでの平和協議の後、1993年の国民選挙に出馬するために、今度は‘仏教徒自由民主党’を設立・指揮した。彼は2000年12月19日に、心不全のためパリで死去。(72)

Khamboly Dy 著者のプロフィール

1981年 Kratie 州で生まれる。2003年以来、Documentation Center of Cambodia (DC-Cam) に勤務。これまでに DC-Cam 出版の「Searching for the Truth (真実を求めて)」にいくつかの記事を載せている他、虐殺史教育プロジェクトを手がけている。Phnom Penh 王立大学英文学卒業。カンボジア国立経営学協会ビジネス経営・管理学卒業。海外では、カナダにあるコンコルディア大学で虐殺史のコースを聴講し、ヴォイス・オブ・アメリカや米ホロコースト記念館でインターンの経験を積む。(73)

写真：倉庫を建設するクメール・ルージュ党员達